

2024

長野県立美術館紀要
第19号



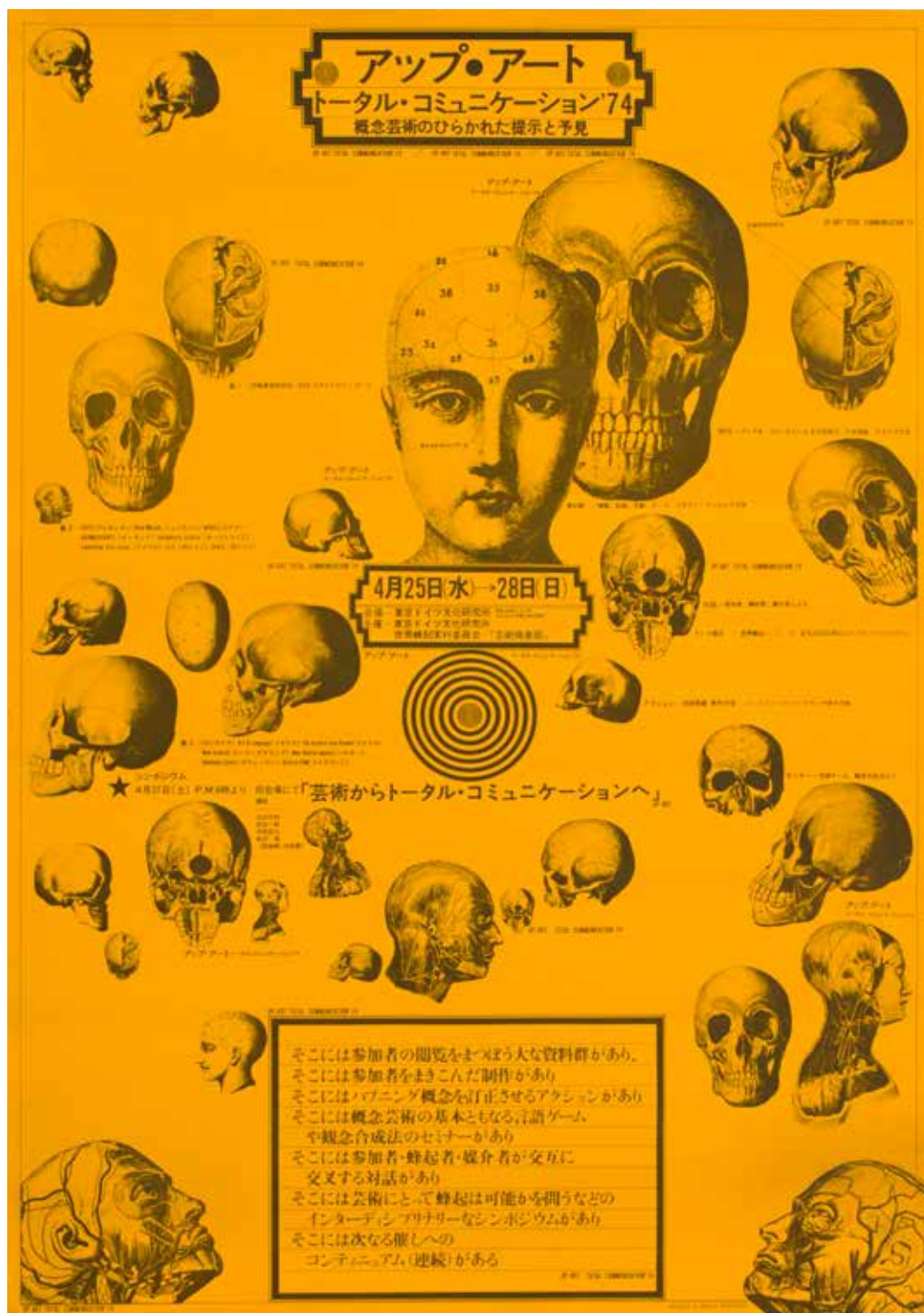
長野県立美術館紀要

— 第19号



池上秀畝《初冬》 1910 (明治43) 年 紙本着色 第4回文展三等賞 東京国立近代美術館 Photo: MOMAT/DNPartcom





「アップ・アート・トータルコミュニケーション'74」展ポスター(デザイン:田中孝道、1974年、個人蔵)

目 次

〈資料紹介〉

池上秀畝^{はこがきてびかえ}「匣書手扣」(信州高遠美術館蔵)について

松浦 千栄子 ————— 8

〈調査報告〉

池上秀畝 制作作品一覧

企画展「生誕 150 年池上秀畝 高精細画人」の調査をもとに

松浦 千栄子 ————— 15

〈研究ノート〉松澤宥の現代芸術資料センター (DCCA) 構想と「オトシマエ」

「キチット オトシマエヲツケレルカ」会開催趣旨書き起こしから

古家 満葉 ————— 65

〈資料紹介〉

はこがきてびかえ 池上秀畝「匣書手扣」(信州高遠美術館蔵)について

長野県立美術館 学芸員

松浦 千栄子

はじめに

「匣書手扣」は、現在の長野県伊那市高遠町出身の日本画家・池上秀畝が制作した作品の記録である。秀畝の郷里にある信州高遠美術館に遺族により寄贈された(註1)。B5サイズほどの和綴じの冊子に、作品の簡単な縮図と、譲渡日、譲渡先などが記載されている。史料総数は全141冊にのぼり、1冊あたり約100頁、各頁におおよそ1作品記載されており、1冊に100点程度とすると、単純計算で1,400点以上の作品が記録されている。個展などに複数の作品を出品した場合は、作品名のみ記載されている場合もあり、実際に記録されている作品数はさらに多いと思われる(図1)。記録された作品は、ほとんどが小型の掛け軸で、一部扇面画なども含んではいるが、展覧会に出品した大型の掛け軸や秀畝が数多く手がけた屏風は含まれていない。記載の日付は制作年ではなく譲渡日、箱書をした日で、それにより「匣書手扣」と題されたのだろう。本史料はこれまであまり紹介されてこなかったが、秀畝の官展など展覧会出品作以外の様々な作品が網羅されており、秀畝の画業を知ることができるとともに、年代不詳作品の制作下限を推定できる貴重な史料でもある。

筆者は展覧会準備の過程でこの史料を確認し、その重要性を認識した。2024年に当館と練馬区立美術館で開催した企画展「生誕150年池上秀畝 高精細画人」展(註2)では、この一部を出品し秀畝の重要な史料として紹介することができた。しかし、所蔵館や地元の博物館などでは、展覧会などで一部が紹介されることはあったが、まとまった調査はこれまで行われておらず、詳細な内容については明らかではない。本稿では今後の調査に先立ち、史料全体を紹介し、記載内容について概観することを目的とする。本史料の調査により、これまで新派に偏って進んできた近代日本画の研究に、旧派画家たちの視点が加わることを期待する。

1. 池上秀畝と「匣書手扣」以前

池上秀畝は、1874(明治7)年に筑摩県西高遠町の裕福な商家に生まれた。本名は國三郎、祖父、父の影響で幼いころから絵を描くことに親しみ、画

註1 所蔵する信州高遠美術館(長野県伊那市)では、1996年に受入。



図1 池上秀畝「匣書手扣」大正6(1917)年-昭和19(1944)年 信州高遠美術館蔵

註2 企画展「生誕150年池上秀畝 高精細画人」は、練馬区立美術館2024年3月16日(土)～4月21日(日)、長野県立美術館5月25日(土)～6月30日(日)の日程で開催した。

家を志すようになる。1889（明治22）年15歳の時、父・秀花とともに上京。後に旧派の重鎮となる荒木寛畝に最初の弟子として入門した。主に官展を中心に出品し、1916（大正5）年から3年連続で文展特選を受賞、帝展では無鑑査、審査員を務めるなど、花鳥画を得意とし、日本画旧派の代表的画家として活躍した。

秀畝は、1889（明治22）年の入門から4年間、荒木家に住み込みで修業した。独立した1893（同26）年の日本美術協会第5回展に「課題画」として《信陽和田領秋雨図》を出品（註3）、翌94（同27）年の日本美術協会第6回展に《一品当朝》（註4）を出品し正式に画壇にデビューした。その後は日本美術協会展や1897（明治30）年に発足した日本画会、荒木塾の塾展である読画会展（註5）、自身の画塾で1912（明治45・大正元）年に設立した伝神洞画塾の塾展（註6）などを中心に作品を発表していく。1907（明治40）年に文部省美術展覧会（通称：文展）が開設されると、第1回展こそ旧派と新派の対立により不出品となったが、翌年の第2回展からは毎年出品し、順調に受賞を重ね画家としての立場も次第に確固たるものとなりつつあった。作品の制作数も年を追うごとに増えていくようである。1916（大正5）年第10回文展に出品した《夕月》が特選第二席を受賞した。「匣書手扣」の記録が始まるのはこの翌年のことである。

註3 「明治廿六年秋季美術展覧会出品目録 上」青木茂監修、東京文化財研究所編纂『近代日本アート・カタログコレクション018日本美術協会第3巻（明治25年～同26年）』株式会社ゆまに書房、2001年、431頁

註4 「明治廿七年秋季美術展覧会出品目録 上」青木茂監修、東京文化財研究所編纂『近代日本アート・カタログコレクション019日本美術協会第4巻（明治27年～同29年）』株式会社ゆまに書房、2001年、158頁

註5 読画会展は1905（明治38）年から開催。

註6 伝神洞画塾の塾展は1919（大正8）年から開催。

2. 「匣書手扣」の記載内容について

秀畝は1916（大正5）年から3年連続文展で特選を受賞し、画家としての絶頂期を迎える。この特選受賞を契機として「匣書手扣」の記録が始まったとする直接的な史料があるわけではないが、名実ともに旧派の代表的画家となり、作品の制作依頼も増加したと想像できる。こうした増加する注文の状況を把握すべく、記録を始めたと推定しても矛盾は無さそうである。

1917（大正6）年6月30日にはじまる記念すべき最初の記録は、斎藤惣三郎という人物に掛け軸を譲渡したというもので、記載は以下のとおり（図2）。

箱書手扣

若松市上一ノ町三間代 斎藤惣三郎殿

尺五絹本設色 画題 睡蓮翡翠 甲寅之作 丁巳六月三十日

この最初の記載で、「匣書手扣」における基本的な情報量が決まっている。全体を通して①譲渡先の氏名と居住地（購入者か受贈者かは現時点では不明）、②作品のサイズ・材質、③画題、④記録日、⑤作品の縮図の5つが主

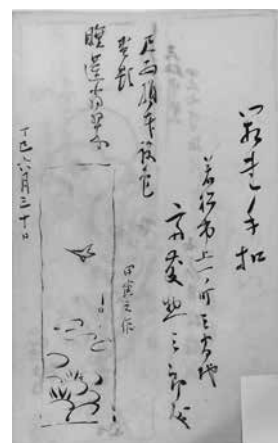


図2 「匣書手扣」の冒頭頁の記載

な情報として記載されている。また、これとは別に制作日が記載される場合もある。この冒頭の頁を例に見ると「甲寅之作」とあり、「匣書手扣」より2年前の1914（大正3）年の制作であることが分かる。記録日と作品の制作年は必ずしも一致しない。縮図は概ね頁の半分ほどを使用した走り描きだが、モチーフや構図がよく分かるように描かれ、これにより現存する作品との同定も比較的容易である。

基本的には1つの作品に対し1頁が割り当てられる。複数の作品が同一の相手に譲渡される場合も縮図は1つずつ描かれるが、大阪三越などで開催された展示販売会などへ出品されたもののなかには、画題名だけが箇条書きにされている場合もある。稀に頁の間に名刺や写真、メモのようなものが挟まれていることがあるが、その頁に記載された作品との関係の有無は不明である。譲渡先は、ほとんどが個人名で、頻繁に記載のある人は、居住地などが省略され姓だけの記載になっていることも多い。全体として東京都内や横浜、また郷里の長野県内の譲渡先が多いが、関西、特に大阪を居住地とする譲渡先がしばしば登場する。大正年間を中心として大阪三越で新作展などをしばしば開催していたことなどもあり、東京で活躍した秀畝だが関西にも多くの有力な顧客がいたことが本史料から確認できる。また譲渡先の個人の所属や肩書き、別の個人からの紹介であることなどが記載されている場合もあり、情報を精査する事で秀畝を取り巻く人脈なども理解できそうである。

長野県内からの依頼の場合は、町名や氏名の記載の前に「信州」と記載されることが多い。記録のある譲渡先で現時点で人物が特定できたのは、松田秀石や石川秀穂など伝神洞画塾で秀畝の弟子であった画家たち、同郷で台湾美術展覧会では一緒に審査員を務めた洋画家の小川秋成、現在の長野県富士見町出身の政治家・小川平吉、上野精養軒の支配人だった妹尾勇吉などがある。

1年間の記録には大体4冊から10冊程度が割かれており（表1）、多い年では「匣書手扣」に記載される作品だけで1年間に1,000点近い作品の依頼を受けていたことになる（註7）。過去に制作した作品を譲渡している場合もあることから、その年の制作数と一致しないとしてもかなりの数に登る。繰り返すが本史料に記録されている作品には展覧会出品作や屏風はほとんど含まれないため、実際の制作や依頼の数はもっと多いと考えられる。

註7 筆者はこれまでに全体の約半数にあたる74冊の調査と簡易撮影を行った。撮影の平均カット数は1冊50カット程度である。それを元に1冊100頁、1頁につき1点の作品として算出した。頁によっては1頁に文字だけで複数の作品名称を記録する箇所もあり、実際に記録される作品の数はこれより多いものもある。

表1 「匣書手扣」冊子ごとの記載年代 ※信州高遠美術館の資料をもとに作成。

収納箱	年号		冊子番号
No.1	丁巳	大正6	1-4
No.1	戊午	大正7	4-10
No.1	己未	大正8	10-20
No.1	庚申	大正9	20-27
No.1	辛酉	大正10	27-34
No.1	壬戌	大正11	34-43
No.1	癸亥	大正12	43-46
No.1	甲子	大正13	46-51
No.1	乙丑	大正14	51-55
No.1	丙寅	昭和1	55-60
No.1	丁卯	昭和2	60-64
No.1	戊辰	昭和3	64-68
No.1	己未	昭和4	68-72
No.1	庚午	昭和5	72-78
No.1／No.2	辛未	昭和6	78-84
No.2	壬申	昭和7	84-88
No.2	癸酉	昭和8	88-93
No.2	甲戌	昭和9	93-99
No.2	乙亥	昭和10	99-103
No.2	丙子	昭和11	103-105
No.2	丁丑	昭和12	105-110
No.2	戊寅	昭和13	110-114
No.2	己卯	昭和14	114-117 (118)
No.2	庚辰	昭和15	117 (118) -122
No.2	辛巳	昭和16	122-126
No.2	壬午	昭和17	126-133
No.2	癸未	昭和18	133-137
No.2	甲申	昭和19	137-139
No.2	一	一	表紙欠損2冊

3. 記載される作品の形態と画題

冒頭でも述べたように、本史料に記載される作品はほとんど全てが掛け軸である。展覧会出品作には屏風を数多く制作した秀畝だが、本史料には六曲一双屏風などはなく、二曲屏風が数点記載されるにとどまる。掛け軸についても展覧会で発表した作品を確認できたが数点である。秀畝は展覧会には屏風を出品することが多かったことや、画塾展など様々な展覧会に作品を出品していたことを考えると、屏風や展覧会出品作に特化した本史料のような記録もあったのだろうか。屏風の史料では、子息の秀一氏によって卷子状にまとめられた下図があり、当館所蔵の2巻と、企画展の調査にあたって確認された1巻の計3巻が現存している。展覧会調査で確認した1巻には、他の2巻にはない所蔵者の情報が記載されており、譲渡日こそないが、「匣書手扣」に似た情報を持つことが注目される。

本史料が注目に値するいくつかの理由の中で最も興味深いのは、旧派の代表的画家であった池上秀畝がどのような画題を多く描いていたのか分かる点である。花鳥画家として名を知られた秀畝ということもあり大半は花鳥画だが、ライフワークだった写生に基づく画題もあり、描かれる動物などの中には花鳥画ではあまり見られないモチーフもある。34巻に記録される象の横顔を描いた掛け軸などは、本画は確認できていないが動物園での写生を元にした可能性が大きい。その他にも仏画や蓬莱や鶴、高砂など縁起のいい画題、雛人形や金太郎のような節句や季節に関連したものなど、様々な画題が登場している。その年の官展に出品した作品と同じ画題を扱ったものもあり、秀畝の興味関心も分かる。

4. まとめと今後の課題

全141冊からなる「匣書手扣」は、柿渋色の表紙に「匣書手扣」、巻数、「伝神洞主」と記載される。表紙のない記録が2冊あるが、巻数に欠番はなく139巻まで一貫して数字が振られている。表紙のない2冊の記載年は不明だが日付がそれぞれ「九月三日」、「十月五日」から始まっており、最後の139巻は秀畝没年の1944（昭和19）年の記録だが、秀畝はこの年の5月に亡くなっていることから、表紙のない2冊は139巻の後に続くものではない。その点を踏まえると少なくとも表紙については、秀畝の没後に遺族か門下生たちの誰かがタイトルと巻数を記載し、整理したものと言える。記録そのものも秀畝本人が記載していたものなのか、途中で記録者が変わっているのか、今後全体の筆跡などを検討する必要があるだろう。

本史料には、この141冊とは別に「備忘録」と題された1冊がある。内容を見ると、一見して息子の秀一氏が秀畝没後に、履行できなかった依頼について、受け取った費用を返金した記録と分かる。この備忘録からは「匣書手扣」とは別に、注文控えのような記録も存在したのではないかと想像できる。秀畝は作品の依頼も多く、注文から納品まで数年かかることもあったようだから、正確に依頼をこなすためには注文控えによる管理も重要であり、そうした記録があればこそ画家の没後に費用を返金することも可能であったろう。

近代日本画の研究は、これまで新派を中心に展開し、特に菱田春草や横山大観など代表的な画家たちについては展覧会も数多く開催され、作品の制作状況や、年不詳作品の制作年検証、画家同士の影響関係など様々な側面から検証が進んでいる。一方で旧派の画家たちの活動についての研究は未だ十分とは言えない。しかし、近代日本画を取り巻く状況を把握するためには、旧派の研究は今後さらに重要となってくるだろう。そうした中で再認識された池上秀畝の作品記録である「匣書手扣」は、秀畝ひとりの画業を検証するためだけでなく、旧派の画家たちの活動や制作を想像させるに足る重要な史料である。今後は「匣書手扣」の記載内容について特に画題や譲渡相手（依頼者）を中心に調査を進め、同時代的な需要や秀畝や旧派画家たちをとりまく人間関係を検証していきたいと考える。また、本史料を所蔵する信州高遠美術館には、このほかにも大量の写生帳や写生旅行の記録類、若い頃の粉本類などが残されている。これらと合わせて調査を進めることで、画塾での指導や作品制作の背景などについても明らかになるだろう。この史料を足がかりに日本画旧派について理解を深めていきたい。

〈資料紹介〉

池上秀畝 制作作品一覧

企画展「生誕150年池上秀畝 高精細画人」の調査をもとに

長野県立美術館 学芸員
松浦 千栄子

当館では、2024年5月から6月にかけて企画展「生誕150年池上秀畝 高精細画人」を開催した(註1)。本展では近代日本画の旧派を代表する画家として、明治後半から昭和戦前期にかけて活躍した日本画家・池上秀畝の画業全体を再検証し、代表作を中心に初期から晩年までの作品と、ライフワークだった写生や記録などの一部を紹介した。展示や図録では紹介できなかったが本展の準備期間中に、池上秀畝に関連する刊行物や作品調査などで確認できる作品の一覧表を作成した。別稿で紹介する秀畝の作品記録「匣書手扣」(信州高遠美術館所蔵)からも明らかなように、池上秀畝は作品数の多さが際立っている。本稿では、展覧会の調査で確認された作品の一覧を紹介する。

本一覧は出版物に掲載された作品と、実物を確認できる作品などを合せてリスト化したものである。一覧の作成にあたり、刊行物は以下を参照し、「出典」の欄にそれぞれ番号を記載した。なお、複数の刊行物に掲載されている作品については、掲載のある刊行物のすべての番号を記載した。

- ① 『池上秀畝展』長野県信濃美術館 1972年
- ② 『山水花鳥の美 池上秀畝展』練馬区立美術館 1988年

註1 企画展「生誕150年池上秀畝 高精細画人」は、練馬区立美術館2024年3月16日(土)～4月21日(日)、長野県立美術館5月25日(土)～6月30日(日)の日程で開催した。

No.	作品名	制作年	和暦	材質技法	形状	寸法(本紙) cm	出品歴等
1	梅	1881	明治14	紙本墨画	軸装	105.0×30.4	
2	がま仙人	1882	明治15	紙本墨画	軸装	143.6×84.8	
3	不明(水仙か)	不明	不明	紙本墨画	軸装		
4	鍾馗	1886	明治19	紙本着色	軸装	24.0×15.6	
5	群雀	1886	明治19	紙本着色	額装	26.8×114.0	
6	歴史人物画	1888	明治21	紙本着色	軸装	104.0×40.8	
7	湖舟清談図	1889	明治22	紙本着色	額装	21.3×45.8	
8	雪中訪友	1890	明治23	紙本着色	軸装	130.4×50.8	
9	桜花群禽	1890	明治23	絹本着色	軸装	124.0×42.0	
10	梅に鶯	1892	明治25	紙本着色	軸装	124.0×30.0	
11	西湖景勝	1892	明治25	紙本着色	六曲一隻	153.3×450.1	
12	水辺群蟲図	1892	明治25	板着色	地袋	各18.0×80.0	
13	三顧之図	1893	明治26	紙本水墨淡彩	六曲一双	169.5×331.8	
14	涅槃釈迦	1893	明治26	紙本着色	軸装	45.0×33.0	

- ③ 『池上秀畝展』長野県伊那文化会館 1992年
- ④ 『池上秀畝画集』信濃毎日新聞社 1984年
- ⑤ 『池上秀畝秀作画集』新葉社 2000年
- ⑥ 『個人秘蔵のお宝公開！池上秀畝の屏風絵展』長野県伊那文化会館
2012年
- ⑦ 『伊那谷が育んだ日本画四人衆 秀畝・芝田・孝坪・微笑～地域が
誇る作品展～』長野県伊那文化会館 2015年

上記刊行物以外に展覧会調査の過程で確認した雑誌や、展覧会目録の記載を典拠とする作品については⑧とした。また、材質形状、出品歴、依頼者など、出典やその他で確認できた情報については極力記載している。実物作品や画像により確認できた署名を判読できたものについては「署名欄」に記載し、判読できていない部分は伏字とした。作品名が同じものが多数あるが、同じ作品だと確認できない限りにおいては、別作品として記載した。

一覧への記載は、展覧会の準備期間中に行った調査で得られた情報(註2)までとした。展覧会終了後に新たに出てきた史料や記録、作品などについては記載していない。本資料は制作途上であり、今後調査を継続し作品に関する情報を拡充していきたい。

註2 当館の展覧会が始まる2024年5月25日までに判明した情報について記載した。それ以降に明らかになった作品などについては含んでいない。

凡例

- ・ 本一覧は2024年に当館と練馬区立美術館で開催した企画展「生誕150年池上秀畝 高精細画人」の調査を通じて判明した池上秀畝の作品をリスト化したものである。
- ・ 実物を確認できたものについては所蔵者を記載している。美術館博物館の所蔵品については、各館の紙目録や収蔵品検索などを、当時の雑誌記事については、国立国会図書館のデジタルコレクションを主として活用した。池上秀畝に関連する雑誌記事については、企画展の公式図録として刊行した『池上秀畝 高精細画人』（青幻舎、2024年）に参考文献として可能な限り記載した。
- ・ 一覧の作成にあたり参照した主要刊行物は前述の通り。

所蔵館 *は出典画集の所蔵者	出典	署名・落款	備考
	②⑤	七年三カ月池上國太郎	
信州高遠美術館		癸羊中冬應囑國山寫	
個人蔵		國山画	
	⑤	十三歳六ヶ月國山敬画	
	⑤	國山十四才六カ月	
	⑤	十四年八カ月國山筆	
	①	十五年八ヶ月國山寫	
	⑤	庚寅孟冬日十六年國山寫	
	①②④	庚寅初冬應囑十六歳国山寫	
	⑤	國山十八年三カ月	
	②③④⑤	明治壬辰孟冬日應囑秀畝青欠	
個人蔵			
信州高遠美術館			
	②④⑤	高遠視緑山満光寺蔵軸 池秀畝縮寫	

No.	作品名	制作年	和暦	材質技法	形状	寸法(本紙) cm	出品歴等
15	信陽和田領秋雨図	1883	明治26				日本美術協会第5回展 課題画
16	大江山鬼賊退治図	1893	明治26	紙本着色	六曲一双	各168.0×346.0	
17	一品当朝	1894	明治27	絹本着色	軸装		日本美術協会第6回展 二等賞
18	信濃國高遠街	1894	明治27	紙本着色	六曲一双	152.0×632.0	
19	高遠城図	1894	明治27	紙本着色	軸装	86.8×122.8	
20	観音図	1895	明治28				日本美術協会展
21	琵琶湖八勝景/ 扶桑三勝景	1895/ 1896	明治 28/29	紙本着色	六曲一双	173.5×364.0	
22	鷺図	1896	明治29				日本美術協会展
23	猩々	1896	明治29	紙本墨書/着色	六曲一隻	155.3×366.0	
24	十六善神図	1896	明治29	絹本着色	軸装	1034×909	
25	鶴図	1896	明治29	紙本着色	六曲一隻	151.3×319.7	
26	琴瑟書畫	1896	明治29	絹本着色	六曲一隻	318.0×154.0	
27	飲中八仙歌意	1896	明治29	絹本着色	六曲一隻	318.0×154.0	
28	雨中鶏	1897	明治30				第1回全国絵画共進会
29	鶴松図	1897	明治30	絹本着色	六曲一双(右隻・ 秀華/左隻・秀畝)		
30	仲麿留別図	1897	明治30				日本美術協会展
31	鷹捕雉子図	1897	明治30				日本美術協会展
32	菊池正観公筑後河奮 戦之図	1897	明治30	紙本着色	軸装	130.5×51.5	
33	雪中瀑布図	1897	明治30	紙本着色	軸装	182.0×93.0	
34	源為朝之図	1897頃	明治30頃	紙本着色	軸装	30.0×38.0	
35	月夜梟図	1898	明治31				日本美術協会展 褒状三等
36	赤壁夜遊図	1898	明治31	絹本着色	軸装	109.2×50.5	
37	夏溪双鹿	1899	明治32				第2回全国絵画共進会
38	孔雀図	1899	明治32				日本美術協会展 褒状一等
39	残月野干図	1899	明治32				第2回日本画会展
40	残月狐	1899	明治32				第3回全国絵画共進会
41	菊花闘鶏之図	1900	明治33	絹本着色	軸装	145.7×70.6	
42	夏圃双鶏	1900	明治33	絹本着色	軸装	156.8×81.5	
43	雙鶏図	1901	明治34				日本美術協会展
44	酔 李白	1901	明治34	絹本着色	軸装	128.0×51.0	
45	紅葉鴛鴦・桜に遊鳩	1901	明治34	絹本着色	六曲一双	各150.0×340.0	
46	秋叢軍鶏図	1902	明治35				第32回日本美術協会展 褒状三等
47	美人(遊女)	1902	明治35	紙本着色	軸装	32.0×41.0	
48	青鶯敗荷	1902	明治35				第5回日本画会展
49	鹿図	1903	明治36	板着色	板戸4面	各157.5×102	
50	物語若武者	1903	明治36	紙本着色	六曲一隻	152.0×320.0	
51	豹	1903	明治36				日本美術協会展
52	鹿図	1904	明治37				第35回日本美術協会展 三等賞銅牌
53	獵夫	1904	明治37				第7回日本画会展
54	鴨の図	1905	明治38				日本美術協会研究会 甲賞(木杯料・褒 状)受賞
55	月下妙曲	1905	明治39				第3回歴史風俗画会展 銅牌
56	春暖	1905	明治40				第8回日本画会展
57	日光神橋故事	1905	明治41				第4回美術研精会展
58	清流孤鹿	1905	明治38		軸装		第1回読画会展

所蔵館 *は出典画集の所蔵者	出典	署名・落款	備考
	⑧		出品目録では「国太郎 号香畝」
飯山陸送株式会社		大江山鬼賊退治図倣狩野法眼元信先生絵巻癸巳盛夏秀畝	
	⑧	秀畝	出品目録では「国太郎 号秀畝」
個人蔵	④	左隻「信濃國高遠街真墨應囑秀畝寢寫」 右隻「甲午孟■應囑秀畝凶人寫」	
伊那市立高遠町歴史博物館	⑤	舊高遠城真景秀畝寫	
	⑧		出品目録では「国太郎 号秀畝」
信州高遠美術館			
	⑧		
信州高遠美術館			書・池上秀華/画・秀畝 父との合作
伊那市高遠町清福寺		裏書「明治29年7月14日納 高遠横町画工師池上秀畝」	
信州高遠美術館	⑤	明治丙午章乃中浣日應囑秀畝池継隆寫意	
	⑤	琴碁書画倣個人図丙午孟冬應囑秀畝継隆	
	⑤	飲中八仙歌意丙午孟冬應囑秀畝継隆	
個人蔵			右隻・池上秀華/左隻・池上秀畝
	⑧		
	⑧		
	②④	明治丁酉應鐘第浣日秀畝書画	
	⑤	村毘鬻伯清■明治丁酉■月塩飽■■■■■寫秀畝■百録寫■	
個人蔵	②④⑤	秀畝	
	⑧		
	②⑤	戊戌林棲下浣日秀畝池継隆	
	⑧		
個人蔵	③⑤	庚子夏日秀畝装	
	⑤	秀畝	
	④	辛丑冬秀畝画	
	⑤	明治辛丑暮秋■■■一日秀畝池継隆作	
	⑧		
	④⑤	壬寅夏日倣先人圖秀畝	
個人蔵		癸卯初夏秀畝筆 継隆	
個人蔵	④	癸卯秀畝	
	⑧		
	⑧		

No.	作品名	制作年	和暦	材質技法	形状	寸法（本紙）cm	出品歴等
59	鹿猿図	1905	明治39				第1回読画会展
60	秋圃雙雉	1905	明治40				第1回読画会展
61	鴨	1905	明治41				第1回読画会展
62	秋溪群猿	1905	明治38				第38回日本美術協会展 褒状二等
63	山間の月図	1906	明治39				美術研精会研究会 三等賞受賞
64	鶏	1906	明治39	絹本着色	軸装	36.5×57.0	
65	虎	1906	明治39				第5回美術研精会
66	水墨孔雀	1906	明治39				第9回日本画会展
67	懸崖雉子図	1906	明治39				日本美術協会常会研究会 甲賞（木杯料）受賞
68	月下猛虎図	1906	明治39				第40回日本美術協会展 三等賞銅牌
69	秋夜	1906	明治39				第2回読画会展
70	時雨	1907	明治40				東京勸業博覧会 二等賞受賞
71	楠公迎鳳輦	1907	明治40				第10回日本画会展
72	雞	1907	明治40				第10回日本画会展
73	歸り路	1907	明治40				第10回日本画会展
74	秋晴（秋色）	1907	明治40	絹本着色	軸装	137.0×79.0	第41回日本美術協会・正派同志会連合展 二等賞銀牌
75	烏骨鶏	1907	明治40				
76	土雛	1907	明治40	絹本着色	軸装	114.0×41.4	
77	孔雀・蘇峽奇勝	1907	明治40				第3回読画会展
78	五月雨	1908	明治41				第4回読画会展
79	五月雨	1908	明治41				第2回文展
80	朝霧	1908	明治41				第11回日本画会展
81	春暖	1908	明治41				第2回正派同志会展
82	秋山歸雉	1908	明治41	絹本着色	軸装	153.3×67.0	第42回日本美術協会展か
83	胡蝶と草花	1908頃	明治41頃	絹本着色	軸装、双福	各111.5×41.6	
84	残月	1909	明治42				第43回日本美術協会展 三等賞銅牌受賞
85	蘆汀	1909	明治42				第12回日本美術協会展
86	松に雉子・柳に鴛鴦	1909	明治42	絹本着色	六曲一双	各125.5×238.0	
87	潮の烟	1909	明治42		二曲一双		第3回文展
88	初冬	1909－10頃	明治42－43	絹本着色	六曲一双	各154×321	
89	時雨	1910	明治43				第5回読画会展
90	暮る秋	1910	明治43				第13回日本画会展
91	時雨	1910	明治43	絹本着色	軸装	52.0×76.0	
92	枯野	1910	明治43	絹本着色	軸装	143.6×84.7	
93	積雪図	1910	明治43				第44回日本美術協会展？
94	避邪之図	1910	明治43	絹本着色	軸装	108.0×40.0	
95	初冬	1910	明治43	紙本着色	六曲一双	各167.0×364.0	第4回文展 三等賞
96	老松喜鵲/竹林棲鶏	1911？	明治44？				第45回日本美術協会展？
97	山小屋	1911	明治44				第45回日本美術協会展 三等賞銅牌
98	日蓮上人避難之図	1911	明治44	絹本着色	軸装	145.2×87.6	第6回読画会展
99	今様美人	1911	明治44				第6回読画会展
100	薄	1911	明治44				第6回読画会展
101	雨の杉	1911	明治44				第6回読画会展
102	十二支	1911	明治44				第6回読画会展

所蔵館 ※は出典画集の所蔵者	出典	署名・落款	備考
	⑧		
	⑤	丙午夏日秀畝寫	
	⑧		
北野美術館	①③④⑤	秀畝	(秋色)は箱書
	⑤	丁未春秀畝筆	
個人蔵	③⑤⑦	秀畝	
	⑤	秀畝	
水野美術館			
日立市郷土博物館	⑤	秀畝寫	
	⑤	庚戌七月前田侯爵家行幸御前揮毫紀念時雨図秀畝■	
信州高遠美術館	⑤	庚戌初夏秀畝寫	
	⑧		
個人蔵		秀畝筆	共箱「池上秀畝筆絹本掛幅/明治庚戌歳晩舊佐藤雅甚作此図 辛亥更衣下浣装裱演成日再題函秀畝
東京国立近代美術館	②③④⑤	秀畝	★参考図版P2-3
	⑧		
一般財団法人北方文化博物館		明治辛亥孟春秀畝池継隆謹寫	

No.	作品名	制作年	和暦	材質技法	形状	寸法(本紙) cm	出品歴等
103	驢原七瀑	1911	明治44				第6回読画会展
104	十二月	1911	明治44				第6回読画会展
105	庚申の夜	1911	明治44				第6回読画会展
106	老杉にふくろう	1911	明治44	絹本着色	軸装	167.8×84.6	
107	雪の竹	1911	明治44				東京勸業博覧会
108	老松喜鵲/竹林棲雉	1911	明治44				第46回日本美術協会展《老松喜鵲》 二等賞銀牌、
109	河原の秋	1911	明治44				第5回文展
110	谷間	1911	明治44		六曲一双		第5回文展 褒状
111	雨後瀑布	1911	明治44				第14回日本画会展 銀賞受賞
112	午日	1912	明治45				第48回日本美術協会展
113	孔雀	1912	明治45		六曲一隻		第48回日本美術協会展 二等賞銀牌
114	猛虎図	1912	明治45				日本美術協会展 皇太子殿下行啓の際、 御席画として揮毫
115	佐渡加茂湖	1912	明治45				第7回読画会展
116	上州妙義山	1912	明治45		二曲一双		第7回読画会展
117	秋嶺勇鳥	1912	明治45/ 大正元	紙本水墨淡彩	六曲一双	171.0×380.0	
118	晚秋花鳥	1912	大正元		双幅		臨時絵画展覧会(日本美術協会展)
119	水墨孔雀	1912	大正元				臨時絵画展覧会(日本美術協会展)
120	朔北	1912	大正元		六曲一双		第6回文展
121	梢の秋	1912	大正元		六曲一双		第6回文展 三等賞
122	鹿	1912	大正元	紙本着色	二曲一隻	170.0×175.0	
123	松上双鶴	1912	大正元		軸装	50.6×69.0	
124	龍頭観音	1912	大正元	紙本着色	軸装	124.5×33.0	
125	伝神洞写生画卷	1912 以降	大正元 以降	紙本着色	卷子6卷	34.0×2100.0	
126	不詳(秋景)	1913	大正2	紙本着色	新座敷欄間		
127	五月霽	1913	大正2		六曲一双		第7回文展 褒状
128	竹林に鷺図	1913	大正2	紙本着色	六曲一双		
129	松溪群禽	1913	大正2	絹本着色	軸装	148.0×71.0	
130	海棠に孔雀	1913	大正2	絹本着色	軸装	133.0×41.0	
131	深淵	1913	大正2	紙本着色	六曲一双	各156.0×352.0	
132	牡丹	1913	大正2	紙本着色	軸装、双幅	129.2×31.0	
133	春谿	1914	大正3		二曲一双		東京大正博覧会 三等賞銅牌
134	白梅群雀図	1914	大正3		双幅		第52回日本美術協会展
135	晴潭(紅葉谷川)	1914	大正3		六曲一双	168.4×372.0	第8回文展 褒状
136	楊柳観音像	1914	大正3	絹本着色	軸装	153.0×56.0	
137	真鶴図	1914	大正3	紙本墨画淡彩	六曲一双	各170.0×366.5	
138	松韻双鶴	1914- 16	大正3-5	絹本金地着色	二曲一双	各166.4×154.4	
139	長閑	1915	大正4				第17回日本画会展
140	兔図	1915	大正4				第53回日本美術協会展 席上制作
141	牡丹図	1915	大正4				第53回日本美術協会展 寄合揮毫
142	劉女・緞仙姑	1915	大正4	絹本着色	軸装、双福	劉女 152.3×69.8	第53回日本美術協会展
143	秋晴	1915	大正4	絹本着色	六曲一双	各173.0×408.5	第9回文展 二等賞第五席
144	牡丹双孔雀	1915	大正4	絹本着色	軸装	139.2×50.3	
145	雪中遊鹿	1915	大正4	絹本着色	軸装	168.2×71.6	

所蔵館 *は出典画集の所蔵者	出典	署名・落款	備考
一般財団法人北方文化博物館		辛亥春日秀畝寫	
	⑧		
	⑧		
	⑧		
	⑧		
信州高遠美術館			
	⑧		
十方庵*	⑤	壬子二月下浣秀畝	
一般財団法人北方文化博物館			
	②⑤	奉送 明治天皇靈柩謹作此図 大正元年九月十三日繼隆	
横浜美術館			
一般財団法人北方文化博物館		癸丑六月中浣	
伊那市常圓寺		左隻左下「大正癸丑拾月下浣/秀畝畫之㊟㊟	
	④	癸丑初夏秀畝寫之	
	④	壬戌夏日秀畝	
十方庵*	①③④⑤	秀畝画	
	②	秀畝寫	練馬図録には1幅のみ掲載、寛畝と対幅
	⑧		
田中本家博物館	⑤	秀畝	
個人蔵	③④	秀畝拝寫■大正甲寅八月中浣也	
	②	大正甲寅晚秋於姫路客中秀畝作也	
水野美術館	⑤	秀畝寫	
	⑧		
	⑧		
個人蔵(劉女のみ)	⑧		
皇居三の丸尚蔵館収蔵	④⑤	乙卯秋日秀畝画	
個人蔵	①③④⑤⑦	乙卯孟秋秀畝寫	
一般財団法人北方文化博物館		乙卯初夏秀畝画	

No.	作品名	制作年	和暦	材質技法	形状	寸法(本紙) cm	出品歴等
146	朝陽白凰	1915	大正4	絹本着色	軸装	139.8×50.0	
147	御嶽	1915	大正4	紙本着色	冊子装	24.2×16.4	
148	夕月	1916	大正5	紙本着色	六曲一双	各159.5×360.0	第10回文展 無鑑査・特選第二席
149	文姫辭胡	1916	大正5		六曲一双		第10回文展 無鑑査
150	烏骨鶏	1916	大正5		二曲一双(金地?)		第55回日本美術協会展 不乞審査 審査員
151	林和靖	1916	大正5	絹本着色	軸装	142.0×51.0	
152	松の図	1916	大正5		襖絵		郷里の堀内伊太郎宅にて揮毫
153	紅葉鴛鴦・桜に雉子	1916	大正5	絹本金地着色	六曲一双	各172×368	
154	静寂図	1916	大正5		軸装		
155	萬年報喜図	1916	大正5	絹本金地着色	六曲一双		大正6年読画会展出品
156	弦月老梟	1916	大正5				日本画会展
157	秋色双鹿	1916- 17頃	大正5-6 頃	紙本金地着色	二曲一隻	168.6×174.4	
158	喜浴恩波	1917	大正6	絹本着色	軸装	140×50.0	
159	峻嶺雨後	1917	大正6	絹本着色	六曲一双	各167.5×382.0	第11回文展 特選第七席
160	柳白鷺図	1917	大正6	紙本着色	二曲一双		
161	翠松白鶴	1917	大正6				日本画会展
162	塩溪之初夏	1915	大正6	絹本着色	軸装	137.4×50.0	
163	四季花鳥	1918	大正7	紙本着色	軸装、四幅対	各239.4×103.5	第12回文展 特選第五席
164	黄柳白鷺	1918	大正7	絹本着色	六曲一双	各 169.0 × 366.0	
165	深宮徒然	1918	大正7	絹本着色	軸装	142.0×50.6	
166	雪景	1919	大正8				第26回日本画会展
167	富士	1919	大正8				伝神洞画塾第1回展
168	春園孔雀	1919	大正8				第13回読画会展
169	深山の春	1919	大正8		軸装		第60回日本美術協会展 元審査員
170	雪の驛路	1919	大正8		六曲一双		第1回帝展 推薦
171	雨中竹	1919	大正8	紙本着色	四曲一双	各 208.0 × 304.5	第1回帝展か
172	鶴松波	1919	大正8	絹本金地着色	六曲一双	各161.7×368.4	
173	青緑山水	1919	大正8	絹本金地着色	六曲一双	各168.5×375.7	
174	天女	1919	大正8	絹本着色	軸装	142.0×51.0	
175	琵琶行	1919	大正8	絹本着色	軸装	142.0×51.0	
176	鷺鳥図	1919	大正8	絹本金地着色	六曲一双	各168.6×363.0	
177	魚籃観音	1919	大正8	絹本着色	軸装	140.8×50.4	
178	薺花眠猫	1919頃	大正8頃	絹本着色	軸装	40.2×51.4	
179	古城驟雨	1919頃	大正8頃	絹本墨画	軸装	70.0×86.0	
180	薄暮落雁	1919頃	大正8頃	絹本墨画	軸装	70.0×86.0	
181	松に双鶴	1919頃	大正8頃	絹本着色	二曲一双	各168.4×166.6	
182	仙客	1920	大正9				第14回読画会展
183	六歌仙	1920	大正9				伝神洞画塾第2回展
184	羽衣	1920	大正9				第22回日本画会展
185	月明	1920	大正9				第62回日本美術協会展
186	孔雀明王	1920	大正9	絹本着色	軸装		第2回帝展 推薦
187	桃源・秋声	1920	大正9	紙本着色	軸装	131.5×32.8	
188	萬年報喜	1920	大正9	絹本金地着色	六曲一双		
189	雲龍之図	1920	大正9	紙本着色	軸装	143.0×51.0	
190	雁の間 襖絵	1920- 21	大正9-10	紙本着色	襖絵14面		

所蔵館 ※は出典画集の所蔵者	出典	署名・落款	備考
	②⑤	乙卯十一月秀畝寫	
	⑤		
東京国立近代美術館	②③⑤	大正丙辰之秋秀畝	
	⑧		
	④	丙辰夏日秀畝寫	
	⑤	大正丙辰春秀畝寫	
	①	丙辰冬秀畝寫	
	⑧		
	⑤	秀畝	
	④		
	②③④⑤	丁巳孟冬秀畝	
伊那市常圓寺		右隻右下「大正丁巳秀畝作之㊤㊤」	
	⑤	秀畝	
長野県立美術館	②③④⑤	秀畝	
長野県立美術館	⑤	秀畝画之（左隻）	
個人蔵	⑤⑦	秀畝	
	⑧		
佐久市立近代美術館	③⑤	大正乙未應鐘上浣秀畝画之	
	④⑤	大正乙未仲春秀畝画之	
	⑤⑥	大正乙未初夏秀畝寫	
	④	大正乙未如月下浣秀畝	
	④	乙未如月秀畝寫	
千葉市美術館			
個人蔵			
	⑤	秀畝	
信州高遠美術館	①③④⑤	秀畝	
信州高遠美術館	①③④⑤	秀畝	
	⑤	秀畝	
個人蔵			
	②④⑤	庚申春日秀畝寫	
伊那市常圓寺	⑥	萬年報喜庚申秋日秀畝寫	
駒ヶ根市立博物館		庚申秋日秀畝画	
曹洞宗大本山總持寺 紫雲臺			

No.	作品名	制作年	和暦	材質技法	形状	寸法(本紙) cm	出品歴等
191	春溪	1921	大正10				信濃美術協会展覧会第1回展覧会
192	長閑	1922	大正11				伝神洞画塾第3回展覧会
193	岐蘇川画卷 天・地・人	1921	大正10	紙本着色	卷子3巻	天63.3×726.5 地 63.3×390.4 人63.2×725.5	第63回日本美術協会展
194	瀟峡滋雨	1921	大正10		四曲一双		第3回帝展 推薦
195	秋郊野鹿	1921	大正10				日本画展覧会(北京)
196	桜花雙鳩・秋草群鶉図	1921	大正10	絹本金地着色	二曲一双	各168.0×165.0	
197	秋晚双雉	1921	大正10	絹本着色	軸装	145.0×51.2	
198	紅梅玄鶴図	1921	大正10	絹本着色	六曲一双	各165.0×370.0	
199	湖畔の月	1921	大正10				伝神洞画塾第4回展覧会
200	音無川の煙雨	1922	大正11				平和祈念東京博覧会
201	夏より秋	1922	大正11		六曲一双		第4回帝展 推薦
202	芙蓉峯	1922	大正11	絹本金地着色	六曲一双	各168.0×366.0	
203	雪中群鴨	1922	大正11	紙本着色	六曲一隻	111.2×262.0	
204	陶淵明	1922	大正11	絹本着色	軸装	142.0×51.0	
205	菊花矮鶏・桜花群鳩	1922	大正11	絹本着色	六曲一双	各169.6×384.0	
206	春秋花鳥図	1922	大正11	紙本金地着色	六曲一双	各136.0×298.8	
207	鳩と山桜	1922	大正11	紙本金地着色	六曲一双		
208	圓鶏	1923	大正12				信濃美術協会第3回展
209	桐図襖絵	1923	大正12	紙本金地着色	四面	各169.5×363.0	
210	小有天園	1923	大正12	紙本着色	軸装	150.0×38.5	
211	琴石	1923	大正12				伝神洞画塾展
212	桐鳳凰図	1923	大正12	絹本金地着色	六曲一双		
213	桜雉芒鴨	1923	大正12	紙本着色	二曲一双		
214	桜花黄鸝・蓬萊山・柘榴白頭	1923	大正12	絹本着色	軸装、三幅対	各127.6×41.4	
215	天保九如	1923	大正12	絹本着色	軸装	143.29×42.2	
216	金太郎	1923	大正12	絹本着色	軸装	114.4×36.0	
217	旭日静波	1923	大正12	絹本着色	軸装	63.0×86.5	
218	歳寒三友之図	1923	大正12	絹本金地着色	六曲一双	各175.0×384.0	
219	黄塵	1924	大正13				伝神洞画塾展
220	紅橙	1924	大正13				伝神洞画塾展
221	丹頂遊白砂	1924	大正13		六曲一双		第5回帝展 委員
222	国之華	1924	大正13	絹本金地着色	六曲一双	各186.6×434.8	
223	福神	1924	大正13	紙本着色	軸装	125.1×30.4	
224	鍾馗	1924頃	大正13頃	絹本着色	軸装	122.3×35.2	
225	孔雀(其一)、孔雀(其二)	1925	大正14		六曲一双		革新第3回日本画会絵画展
226	高士愛鶴	1925	大正14	絹本着色	軸装	128×42.0	
227	老松孔雀	1925	大正14	紙本金地墨画	六曲一双	各169.5×363.0	
228	乾隆帝觀潮歌填白	1925	大正14	紙本着色	軸装	171.8×52.0	
229	湖心亭	1925	大正14	絹本着色	軸装	54.1×72.0	
230	萬年報喜	1925	大正14	絹本金地着色	六曲一双	172.0×376.0	
231	海浜双鶴	1925	大正14	絹本着色	軸装	170.0×70.5	
232	錦翎芳華	1926	大正15				聖徳太子奉賛展第1回展
233	木鼠・逍遙・待月・寒雀	1926	大正15		軸装・四幅対		伝神洞画塾展第8回展

所蔵館 ※は出典画集の所蔵者	出典	署名・落款	備考
長野県立美術館	②⑤	秀畝寫	
練馬区立美術館	③⑤	秀畝(左隻)/秀畝寫(右隻)	
	⑤	秀畝	
個人蔵		辛酉初冬秀畝作	
個人蔵			
伊那市常圓寺		右隻右下「秀畝㊤㊤」	箱書「秀畝手題㊤/時壬戌一月下浣」
個人蔵	②③④⑤		
	④	壬戌之春秀畝寫	
	⑤	壬戌之春■湖畔客次秀畝画之(左隻)	
	⑤	秀畝	
個人蔵		壬戌之春鶯湖畔客次秀畝画之	
個人蔵	②		
	②⑤	癸亥■■秀畝山樵	
伊那市常圓寺		左隻左下「癸亥秋日/秀畝寫㊤㊤」	
伊那市常圓寺		右隻右下「大正癸亥初冬巴■客中/秀畝畫㊤㊤」	
	⑤	丹崖■座■雲間此日蓬萊第一山癸亥孟春秀畝寫(中幅)	
	⑤	大正癸亥秋八月秀畝寫	
	⑤	秀畝寫癸亥春日	
	⑦	癸亥初冬秀畝画	
個人蔵			
皇居三の丸尚蔵館収蔵	⑤	秀畝(右隻・金字)、左隻は画印のみ	
	⑤	甲子■春秀畝	
	⑤	秀畝	
三重県立美術館			
伊那市常圓寺	②	右隻右下「大正己丑一月下浣寫干桑名客中時瓶梅漸破 蕾籠巢/一■■己報春傳神洞主秀畝」	
	⑤	大正乙丑十一月下浣秀畝寫并録乾隆帝觀潮歌填白	
	⑤	乙丑季秋秀畝作	
信州高遠美術館			
伊那市立長谷中学校	⑥	乙丑晩春秀畝画	

No.	作品名	制作年	和暦	材質技法	形状	寸法(本紙) cm	出品歴等
234	池の雨	1926	大正15				第4回日本画会展
235	遠山飛鶴(双鶴)	1926	大正15		軸装	126.4×41.4	
236	大楠公桜井駅決別之図	1926	大正15	絹本着色	軸装	168.0×86.0	
237	高土観瀑	1926	大正15	絹本着色	軸装	143.0×51.0	
238	歳寒三友	1926	大正15	絹本金地着色	六曲一隻	208.0×421.0	第7回帝展 委員
239	白狐	1926	大正15				第72回日本美術協会展
240	樺太狐	1926	大正15	絹本着色	軸装	126.0×41.5	
241	早春八哥	1926	大正15	紙本着色	軸装	119.7×41.6	
242	洗鱗	1926	昭和2				日本画会革新第5回展
243	初夏(雉子)	1926	昭和2				第20回読画会展
244	喜占春魁	1926	昭和2	絹本着色	軸装	136.8×50.4	
245	群卵	1926	昭和2	絹本着色	軸装	144.6×48.8	
246	松上孔雀	1927	昭和2	絹本着色	軸装	130.0×41.0	
247	渭塘奇遇	1927	昭和2	絹本着色	3幅対(当初衝立か)	260.0×137.0	第8回帝展 委員
248	武陵桃源・楓林停車	1927	昭和2	絹本着色	軸装・双幅	各129.1×41.1	
249	劉阮天台図	1927	昭和2	絹本着色	軸装	140.2×50.6	
250	王庭	1928	昭和3				第21回読画会展
251	松に白鷹・桃に青鸞図	1928	昭和3	板着色	表裏二面	各180.0×190.0	旧蜂須賀侯爵邸板戸
252	蜀栈道	1928	昭和3	紙本着色	額装	62.2×60.8	第10回伝神洞画塾展
253	瀑布	1928	昭和3				第10回伝神洞画塾展
254	瑞鳳匝日	1928	昭和3				第10回伝神洞画塾展
255	沼之雨・渚之月	1928	昭和3		双幅		第9回帝展 元委員
256	猩々鸚哥	1928	昭和3		軸装か		第78回日本美術協会展
257	花鳥十二ヵ月	1928	昭和3	紙本着色	軸装、12幅	各135.0×33.5	
258	白衣観音像	1928	昭和3	絹本着色	軸装	129.2×48.8	
259	喜浴恩波	1928	昭和3	絹本着色か	軸装か		
260	唐美人図	1929	昭和4	絹本着色	軸装	138.8×51.0	
261	寒水	1929	昭和4				第7回日本画会展
262	羅漢寺之煙雨	1929	昭和4				伝神洞画塾第11回展
263	清明	1929	昭和4				伝神洞画塾第11回展
264	高麗雉子	1929	昭和4				伝神洞画塾第11回展
265	鎮江	1929	昭和4				第22回読画会展
266	塘江	1929	昭和4				
267	翠禽紅珠	1929	昭和4	紙本着色	二曲一隻	238.0×215.0	第10回帝展 元委員
268	秋晴	1929	昭和4				第81回日本美術協会展
269	田家の朝	1929	昭和4	絹本着色	軸装	143.0×51.0	
270	牡丹孔雀図	1929	昭和4	絹本着色	軸装	131.7×42.6	秀畝画伯新作展覧会(上野・梅川亭)
271	牧牛	1929	昭和4	絹本着色	軸装	138.8×50.7	
272	幽溪春暉	1930	昭和5	絹本着色	軸装	130.6×42.0	東京会春季展(東京美術倶楽部)
273	長門峡	1930	昭和5				第2回聖徳太子奉賛展
274	軍鶏	1930	昭和5				伝神洞画塾第12回総合展覧会
275	秋晴	1930	昭和5				伝神洞画塾第12回総合展覧会
276	吹雪	1930	昭和5				伝神洞画塾第12回総合展覧会
277	小春	1930	昭和5				伝神洞画塾第12回総合展覧会
278	栗鼠	1930	昭和5				伝神洞画塾第12回総合展覧会
279	梢	1930	昭和5				伝神洞画塾第12回総合展覧会

所蔵館 ※は出典画集の所蔵者	出典	署名・落款	備考
一般財団法人北方文化博物館			
伊那小学校	③④⑤⑦	大正丙寅春日秀畝池継隆謹寫	
個人蔵		丙寅夏日■■■■■■■■秀畝	
水野美術館	②③④⑤	秀畝	
	⑧		
	②④	南樺巡遊中觀干大泊港丙寅十月中浣秀畝寫	
	⑤	丙寅初夏秀畝寫之	
	⑤	喜占春魁図昭和改元第一春秀畝寫	
個人蔵		昭和丁卯新春秀畝寫于伝神洞中	
	①③④⑤	綉身翻松上屏風昭和丁卯春四月秀畝画於伝神洞中	
信州高遠美術館	②③④⑤	昭和丁卯秋日秀畝画干伝神洞中	
個人蔵			
個人蔵			
在日オーストラリア大使館	③⑤	昭和戊辰初冬秀畝画之(桃に青鸞)、秀畝作(松に白鷹)	
個人蔵	②⑤	昭和戊辰五月下浣秀畝寫併録本十白蜀道難一節	
		昭和戊辰五月下浣秀畝寫併録本十白蜀道難一節	
	⑧		
	④	誕生仏描いた軸に署名「昭和戊辰四月釈尊拝誕生佛 秀穂寫干伝神洞」他は「秀畝」のみ	
	⑤	昭和戊辰一月下浣秀畝池継隆薫沐拜寫	
	①	喜浴恩波図昭和戊辰初冬秀畝寫	
	⑤	昭和乙巳盛夏秀畝画之	
伊那市常圓寺	②③④⑤⑦	秀畝	
	⑧		
	④⑤	昭和乙巳三月作秀畝	
	⑤	秀畝	
個人蔵			
東京国立近代美術館			

No.	作品名	制作年	和暦	材質技法	形状	寸法(本紙) cm	出品歴等
280	遠山己雪	1930	昭和5				伝神洞画塾第12回総合展覧会
281	黄昏薄	1930	昭和5				伝神洞画塾第12回総合展覧会
282	白鷺	1930	昭和5				伝神洞画塾第12回総合展覧会
283	初雪	1930	昭和5				伝神洞画塾第12回総合展覧会
284	群禽喙秋	1930	昭和5				ローマ日本美術展
285	奥羽二題	1930	昭和5				第23回読画会展
286	佐久間象山先生	1930	昭和5	絹本着色	軸装	221.5×140.5	第11回帝展 元委員
287	竹林群雀	1930	昭和5	絹本着色	軸装	155.5×71.5	
288	小春	1930	昭和5				第84回日本美術協会展
289	雁頭鷺	1930	昭和5	絹本着色	額装	200.0×300.0	
290	巢籠	1930-35頃	昭和5-10頃	紙本墨画淡彩	軸装	130.1×32.4	
291	富士と三保松原	1931	昭和6	紙本金地着色	六曲一双	各168.0×366.0	
292	白梅紅葉	1931	昭和6	絹本着色	二曲一双	各170.0×174.6	
293	不忍池図	1931	昭和6	紙本着色	一面	45.6×45.7	
294	牡丹孔雀図	1931	昭和6	絹本着色	六曲一双	各168.3×362.4	
295	唐崎の松	1931	昭和6				第24回読画会展
296	金剛山	1931	昭和6				第87回日本美術協会展
297	霜梢・露叢	1931	昭和6	紙本着色	軸装・双幅	各237.0×81.0	第12回帝展 元委員
298	松溪載鶴	1931	昭和6	絹本着色	軸装	144.6×50.6	
299	時雨	1931	昭和6	絹本着色	軸装	141.4×51.8	
300	白鷹	1931	昭和6	絹本着色	軸装	143.4×51.0	
301	老子過関	1931	昭和6	絹本着色	軸装	144.2×50.8	
302	懸泉	1932	昭和7				第25回読画会展
303	花鳥図	1932	昭和7	絹本着色	額装	121.0×136.0	
304	秋雨	1932	昭和7	絹本着色	軸装	161.0×177.5	第13回帝展 元委員
305	巨浪群鶴図	1932	昭和7	絹本著色	六曲一双	各168.0×362.0	
306	時雨	1932	昭和7				第90回日本美術協会展
307	春秋花鳥	1932	昭和7		2面		外務省依頼、長春領事館のため制作
308	聖徳太子像	1932	昭和7	紙本着色	軸装	166.0×96.0	
309	秀畝の間	1932	昭和7	板着色	欄間・天井画		
310	老梅に白頭鳥・苔岩に鷓鴣・竹垣に寒椿	1932頃か	昭和7頃か	板着色	板4面(内2面は表裏)	各176.0×89.0	
311	花鳥画	1932頃-39頃か	昭和7頃-14頃	板着色	格天井		矢吹家住宅仏間
312	十二瀑	1933	昭和8				第26回読画会展
313	七星門	1933	昭和8				第92回日本美術協会展
314	盛夏	1933	昭和8	絹本金地着色	六曲一隻	208.0×421.0	第8回日本画会展
315	苦家之秋	1933	昭和8				第14回帝展 審査員
316	龍虎	1933	昭和8	紙本着色	六曲一双	各167.0×348.0	
317	瀑布	1933	昭和8	紙本着色	額装	181.6×51.2	
318	水鳥・黄梅花・菊	1933	昭和8		襖絵		久邇宮家襖絵として制作
319	瓊棲瑞鶴	1934	昭和9				太白洞新作画展
320	溪澗野雉・威震八荒	1934	昭和9	絹本着色	双幅	各195.0×86.0	
321	夕暮れ	1934	昭和9				日本画会昭和9年度展
322	午間	1934	昭和9				京都総合美術展
323	黄昏	1934	昭和9				第27回読画会展

所蔵館 ※は出典画集の所蔵者	出典	署名・落款	備考
象山神社	②③④⑤	庚午之秋秀畝画	
伊那市	⑤	昭和庚午初冬秀畝寫干伝神洞	
内閣総理大臣公邸	⑤	昭和五年庚午十二月中浣秀畝池継隆画	当館に原寸下図あり④には《怒濤猛鷲》として下図掲載、制作年を昭和16年とする
東京国立近代美術館			
伊那市創造館	①③④⑤	昭和辛未春日秀畝作干伊那客中	
	⑦	辛未夏日秀畝(左隻・紅葉)	
泰阜村学校美術館	②	昭和辛未盛夏秀畝寫干伝神洞	
伊那市常圓寺	⑥	右隻右下「昭和辛未林鐘下浣/秀畝畫之㊦㊦」	
個人蔵(露叢のみ)	⑦	秀畝寫干伝神洞	
個人蔵			
個人蔵	③④⑤⑦	辛未夏日秀畝画	
個人蔵	③④⑤⑦	秀畝	
個人蔵			
	⑤	壬申之春秀畝画	
長野県立美術館	③⑤	秀畝	
松岡美術館		壬申之秋秀畝画	
	④	昭和壬申晩秋秀畝池継隆謹寫	
ホテル雅叙園東京	③		
ホテル雅叙園東京	⑤	秀畝	竹垣に寒椿は所在不明
福島県矢吹家			
水野美術館	②③④⑤	秀畝画	
伊那市常圓寺	①③④⑤⑥	右隻右下「癸酉春日 秀畝畫㊦㊦」	
	⑤		
横浜美術館	⑤	秀畝	

No.	作品名	制作年	和暦	材質技法	形状	寸法（本紙）cm	出品歴等
324	秋日和	1934	昭和9	絹本着色	額装	293.3×147.8	第15回帝展 元審査員
325	釣橋之煙雨 臺灣大魯閣峽中	1935	昭和10				第99回日本美術協会展
326	閑寂	1935	昭和10				第28回読画会展
327	群雁	1935	昭和10				日本画会昭和10年度展
328	雪後	1935	昭和10				日本橋三越増築完成記念展
329	秋山遊鹿	1936	昭和11				池上秀畝日本画展（大阪高島屋）
330	蘆汀群雁	1936	昭和11				池上秀畝日本画展（大阪高島屋）
331	琵琶行	1936	昭和11				池上秀畝日本画展（大阪高島屋）
332	高梢	1936	昭和11				池上秀畝日本画展（大阪高島屋）
333	五鶴	1936	昭和11				池上秀畝日本画展（大阪高島屋）
334	狐	1936	昭和11				池上秀畝日本画展（大阪高島屋）
335	狸	1936	昭和11				池上秀畝日本画展（大阪高島屋）
336	白鷹	1936	昭和11				池上秀畝日本画展（大阪高島屋）
337	長春孔雀	1936	昭和11				池上秀畝日本画展（大阪高島屋）
338	金剛山中三仙巖之驟雨	1936	昭和11				第百回日本美術協会記念総合展覧会
339	緑蔭	1936	昭和11				日本画会展
340	吐綬鶏	1936	昭和11				昭和11年文展招待展
341	小春	1936	昭和11				池上秀畝個人展（日本橋三越）
342	遠山已雪	1936	昭和11				池上秀畝個人展（日本橋三越）
343	白鷺	1936	昭和11				池上秀畝個人展（日本橋三越）
344	軍鶏	1936	昭和11				池上秀畝個人展（日本橋三越）
345	残月暮雪	1936	昭和11				池上秀畝個人展（日本橋三越）
346	初雪	1936	昭和11				池上秀畝個人展（日本橋三越）
347	松陰	1936	昭和11				池上秀畝個人展（日本橋三越）
348	吹雪	1936	昭和11				池上秀畝個人展（日本橋三越）
349	栗鼠	1936	昭和11				池上秀畝個人展（日本橋三越）
350	群鶏	1936	昭和11				池上秀畝個人展（日本橋三越）
351	梨花錦鶏・武陵桃源・ 柘榴銀鶏	1936	昭和11	絹本着色	軸装・三幅対	各124.0×42.0	
352	初雪	1936	昭和11	紙本着色	六曲一双	各178.0×363.0	
353	暮雪	1936	昭和11	絹本着色	軸装	68.1×85.3	読画会展第29回展
354	群鶴	1936	昭和11	絹本着色	軸装	124.3×43.0	
355	芙蓉峰図	1936	昭和11	紙本墨画	軸装・3幅対	15.02×180.3	
356	飛蝶	1937	昭和12	紙本着色	額装（元欄間 絵）4面		旧目黒雅叙園欄間
357	秋晴	1937	昭和12	紙本着色	軸装	60.0×76.5	
358	荒磯	1937	昭和12				日本画会展
359	春寒	1937	昭和12				第30回読画会展
360	颯爽	1937	昭和12				第1新文展 無監査
361	初冬	1937	昭和12				第103回日本美術協会展
362	牡丹・唐獅子	1937	昭和12		金壁		出雲大社櫓の間のために制作
363	天井画 扇面 （松・竹・鶴・鳳凰）	1937	昭和12	板着色	板4面	各117×117	
364	鳳凰	1937	昭和12	絹本着色	六曲一双	各167.0×372.8	
365	清麿直奏図	1938	昭和13				憲兵学校講堂のための制作
366	雄姿	1938	昭和13				本山竹荘還暦記念東西大家新作画展

[illegible]

No.	作品名	制作年	和暦	材質技法	形状	寸法(本紙) cm	出品歴等
367	国香(蘭)	1938	昭和13				第2回新文展 無鑑査
368	鶴松図	1938	昭和13	絹本着色	六曲一双	各172.7×375.2	
369	朝陽白鳳	1938	昭和13				池上秀畝「月」十五題展(銀座資生堂)
370	二日月	1938	昭和13				池上秀畝「月」十五題展(銀座資生堂)
371	嵯峨野の月	1938	昭和13				池上秀畝「月」十五題展(銀座資生堂)
372	月宮殿	1938	昭和13				池上秀畝「月」十五題展(銀座資生堂)
373	断崖月明	1938	昭和13				池上秀畝「月」十五題展(銀座資生堂)
374	野梅	1938	昭和13				池上秀畝「月」十五題展(銀座資生堂)
375	松梢清暉	1938	昭和13				池上秀畝「月」十五題展(銀座資生堂)
376	秋聲	1938	昭和13				池上秀畝「月」十五題展(銀座資生堂)
377	新月杜鵑	1938	昭和13				池上秀畝「月」十五題展(銀座資生堂)
378	春宵	1938	昭和13				池上秀畝「月」十五題展(銀座資生堂)
379	背月	1938	昭和13				池上秀畝「月」十五題展(銀座資生堂)
380	竹里館	1938	昭和13				池上秀畝「月」十五題展(銀座資生堂)
381	月白船黒	1938	昭和13				池上秀畝「月」十五題展(銀座資生堂)
382	大川端之月	1938	昭和13				池上秀畝「月」十五題展(銀座資生堂)
383	異郷の月	1938	昭和13				池上秀畝「月」十五題展(銀座資生堂)
384	北畠顕家卿像	1939	昭和14				霊山神社(福島県)に奉納
385	黒光司	1939	昭和14				美之国15周年記念画展
386	春早し	1939	昭和14				第32回読画会展
387	柳蔭	1939	昭和14				宮崎井南居新作画展
388	黎明	1939	昭和14		額装		ニューヨーク万国博覧会世界美術展 展覧会 4等受賞
389	皇化洽	1939	昭和14	絹本着色	軸装	145.6×168.0	第3回新文展 無鑑査
390	高原秋早	1939	昭和14				白日荘秋季新作画展
391	残果	1939	昭和14				高島屋現代名家新作展
392	孔雀間	1939	昭和14		壁画		旧目黒雅叙園壁画
393	老松稚松	1940	昭和15	絹本金地着色	二曲一双	各173.0×189.0	
394	山せみの図	1940	昭和15				東京会日本画新作展
395	老秋	1940	昭和15		六曲一双		紀元二千六百年奉祝展
396	夏二題	1940	昭和15	絹本金地着色	二曲一双	各166.0×155.0	
397	春和・夏殷・秋爽・ 冬静	1940	昭和15	絹本着色	軸装・四幅対	各139.0×51.5	
398	日暉沙松	1940	昭和15				日の出二十題
399	巨巖爽日	1940	昭和15				日の出二十題
400	金鴉潮光	1940	昭和15				日の出二十題
401	陽烏蘆洲	1940	昭和15				日の出二十題
402	東岡日温	1940	昭和15				日の出二十題
403	日恵稚松	1940	昭和15				日の出二十題
404	日照翠葉	1940	昭和15				日の出二十題
405	金烏躍濤	1940	昭和15				日の出二十題
406	旭匂山櫻	1940	昭和15				日の出二十題
407	日出梅香	1940	昭和15				日の出二十題
408	旭日静波	1940	昭和15				日の出二十題
409	蓬萊仰日	1940	昭和15				日の出二十題
410	日洽豊稔	1940	昭和15				日の出二十題
411	懸日雙松	1940	昭和15				日の出二十題
412	旭光瞳々	1940	昭和15				日の出二十題

No.	作品名	制作年	和暦	材質技法	形状	寸法（本紙）cm	出品歴等
413	滄海耀靈	1940	昭和15				日の出二十題
414	日浴龍孫	1940	昭和15				日の出二十題
415	帆影臨照	1940	昭和15				日の出二十題
416	疊山分明	1940	昭和15				日の出二十題
417	朝日潮平	1940	昭和15				日の出二十題
418	片時雨	1941	昭和16	絹本着色	額装	178.0×228.0	第4回新文展 無鑑査
419	奮闘	1940	昭和15				池上秀畝伝神洞画塾献画展
420	竹田写	1942	昭和17	絹本着色	額装	124.5×34.0	
421	時雨	1942	昭和17				池上秀畝社中以心社第3回展
422	白鷹	1942	昭和17				
423	雪風	1942	昭和17				第5回新文展 無鑑査
424	咆哮	1942	昭和17	絹本着色	額装	57.0×72.0	政府へ献納
425	松竹梅	1942	昭和17	絹本金地着色	二曲一双	各148.0×136.0	
426	決闘	1942	昭和17	絹本着色	軸装	86.5×115.7	第6回新文展 元審査員
427	大内山	1942	昭和17	絹本着色	軸装	三尺横幅	大詔奉戴日画
428	大和心	1942	昭和17	絹本着色	軸装	一尺三寸縦幅	大詔奉戴日画
429	神宮	1942	昭和17	絹本着色	軸装	二尺五寸巾横幅	大詔奉戴日画
430	元寇	1942	昭和17	絹本着色	軸装	一尺八寸縦幅	大詔奉戴日画
431	大楠公	1942	昭和17	絹本着色	軸装	二尺五寸巾横幅	大詔奉戴日画
432	親房卿	1942	昭和17	絹本着色	軸装	一尺八寸縦幅	大詔奉戴日画
433	威振八荒	1942	昭和17	絹本着色	軸装	三尺横幅	大詔奉戴日画
434	豊太閤	1942	昭和17	絹本着色	軸装	一尺八寸縦幅	大詔奉戴日画
435	西山公	1942	昭和17	紙本着色	軸装	二尺五寸横幅	大詔奉戴日画
436	菊池武時	1942	昭和17	紙本着色	軸装	一尺五寸縦幅	大詔奉戴日画
437	高千穂	1942	昭和17	紙本着色	軸装	三尺横幅	大詔奉戴日画
438	荒鷲	1942	昭和17	紙本着色	軸装	二尺五寸横幅	大詔奉戴日画
439	秋草芙蓉	1942-43	昭和17-18	絹本金地着色	二曲一双	各171×174.8	
440	富嶽	1943	昭和18				陸軍献納画
441	靈峰朝晴	1943	昭和18	紙本着色	額装	三尺（90四方か）	大詔奉戴日画
442	山桜映暁	1943	昭和18	紙本着色	軸装	77.3×87.0	大詔奉戴日画
443	神風	1943	昭和18	紙本着色	四曲一双	各175.0×370.0	大詔奉戴日画
444	北条時宗	1943	昭和18	紙本着色	額装	三尺（90四方か）	大詔奉戴日画
445	信濃宮	1943	昭和18	紙本着色	額装	三尺（90四方か）	大詔奉戴日画
446	顯家出陣	1943	昭和18	紙本着色	額装	三尺（90四方か）	大詔奉戴日画

所蔵館 ※は出典画集の所蔵者	出典	署名・落款	備考
東京都現代美術館	②③⑤	秀畝作	
	④	昭和壬午初夏臨拳伝神洞主秀畝	
東京国立近代美術館	②③⑤	秀畝作	
個人蔵	②③④⑤	左隻「癸未初冬秀畝作」	
信州高遠美術館	①④⑤	癸未秋日秀畝作	
	⑧		『丹心揮彩：奉戴日記念画』（昭和18年、大塚巧芸社）、1月8日作
	⑧		『丹心揮彩：奉戴日記念画』（昭和18年、大塚巧芸社）、2月8日作
	⑧		『丹心揮彩：奉戴日記念画』（昭和18年、大塚巧芸社）、3月8日作
	⑧		『丹心揮彩：奉戴日記念画』（昭和18年、大塚巧芸社）、4月8日作
個人蔵	⑧		『丹心揮彩：奉戴日記念画』（昭和18年、大塚巧芸社）、5月8日作
	⑧		『丹心揮彩：奉戴日記念画』（昭和18年、大塚巧芸社）、6月8日作
	⑧		『丹心揮彩：奉戴日記念画』（昭和18年、大塚巧芸社）、7月8日作
	⑧		『丹心揮彩：奉戴日記念画』（昭和18年、大塚巧芸社）、8月8日作
	⑧		『丹心揮彩：奉戴日記念画』（昭和18年、大塚巧芸社）、9月8日作
	⑧		『丹心揮彩：奉戴日記念画』（昭和18年、大塚巧芸社）、10月8日作
	⑧		『丹心揮彩：奉戴日記念画』（昭和18年、大塚巧芸社）、11月8日作
	⑧		『丹心揮彩：奉戴日記念画』（昭和18年、大塚巧芸社）、12月8日作
信州高遠美術館			
熱田神宮奉獻	⑧		『丹心揮彩：奉戴日記念画』（昭和19、大塚巧芸社）、昭和18年2月8日作
滋賀県立近代美術館	⑧	必勝祈願昭和癸未三月八日秀畝作之	『丹心揮彩：奉戴日記念画』（昭和19、大塚巧芸社）、近江神宮献納画
靖国神社	⑧	古希印	『丹心揮彩：奉戴日記念画』（昭和19、大塚巧芸社）
宮崎宮奉獻	⑧	戦捷祈願昭和癸未四月八日秀畝■作	『丹心揮彩：奉戴日記念画』（昭和19、大塚巧芸社）
諏訪神社奉獻	⑧	昭和癸未五月八日■■■■戦捷祈願	『丹心揮彩：奉戴日記念画』（昭和19、大塚巧芸社）
石清水八幡宮奉獻	⑧	戦勝祈願癸未六月八日秀畝謹作	『丹心揮彩：奉戴日記念画』（昭和19、大塚巧芸社）

No.	作品名	制作年	和暦	材質技法	形状	寸法(本紙) cm	出品歴等
447	小楠公	1943	昭和18	紙本着色	額装	三尺(90四方か)	大詔奉戴日画
448	繫鷹	1943	昭和18	紙本着色	額装	三尺(90四方か)	大詔奉戴日画
449	禁苑菊馨	1943	昭和18	紙本着色	額装	三尺(90四方か)	大詔奉戴日画
450	北条時宗	1943	昭和18	絹本着色	軸装	118.4×30.0	大詔奉戴日画
451	武光奮戦	1943	昭和18	紙本着色	額装	三尺(90四方か)	大詔奉戴日画
452	名和長年	1943	昭和18	紙本着色	額装	三尺(90四方か)	大詔奉戴日画
453	猛鷲離陸	1943	昭和18	紙本着色	額装	78.0×88.0	大詔奉戴日画
454	海上日出	1943	昭和19	紙本着色	額装	三尺(90四方か)	大詔奉戴日画
455	金剛山	1944	昭和19	絹本着色	軸装	79.0×90.0	大詔奉戴日画
456	舞楽之図	1944	昭和19	絹本着色	軸装	49.0×58.0	
457	早咲	1944	昭和19	絹本着色	軸装	128.9×41.8	
458	歳寒三友	1926-44	昭和年間		六曲一双		
459	藤吉郎普請之図	不詳		紙本着色	軸装	136.8×61.0	
460	児島高德之図	不詳		絹本着色	軸装	75.7×40.3	
461	柳に鷺・桜に雉子	不詳		絹本着色	軸装・双福	各128.8×50.5	
462	蓮池鴨	不詳		絹本着色	軸装	132.0×49.4	
463	桜下美雉	不詳		絹本着色	軸装	104.6×61.8	
464	樹下双鹿図	不詳		絹本着色	軸装	122.2×42.0	
465	釈尊	不詳		紙本着色	軸装		
466	観世音蔵	不詳		絹本着色	軸装	125.0×51.0	
467	鷺図	不詳		絹本着色	軸装	141.0×50.90	
468	香風深浅	不詳		絹本着色	軸装	155.0×58.0	
469	溪流雙雉	不詳		絹本着色	軸装	141.0×50.0	
470	鹿図	不詳		絹本着色	軸装	105.0×34.4	
471	蓮と鶴	不詳		絹本着色	軸装	111.5×41.6	
472	猿公	不詳		絹本着色	軸装	122.0×36.0	
473	武者絵	不詳		紙本着色	六曲一隻	170×344.5	
474	秋塘双鴨・春崖棲雉	不詳		絹本着色	軸装・双福	各110.6×42.0	
475	蓬萊山水	不詳		絹本着色	軸装・双福	各125.5×41.8	
476	秋月玲猪	不詳		絹本着色	軸装	131.0×51.0	
477	鴨	不詳		絹本着色	軸装	124.0×47.0	
478	高砂	不詳		絹本着色	軸装・三幅対	各152.0×32.0	
479	雨後瀑布	不詳		絹本着色	軸装	141.5×50.5	
480	間林遊鹿之図	不詳		絹本着色	軸装	153.5×72.0	
481	梅花鴛鴦	不詳		絹本着色	軸装	141.0×50.0	
482	葡萄小禽	不詳		絹本着色	軸装	126.5×41.5	
483	秋晴	不詳		絹本着色	軸装	156.0×51.0	
484	春苑鸚鵡・秋圃軍鶏	不詳		絹本着色	軸装(現在は額装)・双福	各137.0×41.0	

所蔵館 ※は出典画集の所蔵者	出典	署名・落款	備考
石上神宮奉献	⑧	戦捷祈願癸未七月八日秀畝謹作	『丹心揮彩：奉戴日記念画』（昭和19、大塚巧芸社）
香取神宮奉献	⑧	戦捷祈願昭和癸未八月八日秀畝作	『丹心揮彩：奉戴日記念画』（昭和19、大塚巧芸社）
榎原神宮奉献	⑧		『丹心揮彩：奉戴日記念画』（昭和19、大塚巧芸社）、昭和18年9月8日作
	⑧	昭和癸未初秋秀畝作	
阿蘇神宮奉献	⑧	戦捷祈願癸未十月八日秀畝作	『丹心揮彩：奉戴日記念画』（昭和19、大塚巧芸社）
吉野神宮奉献	⑧	戦捷祈願昭和癸未十一月八日秀畝作之	『丹心揮彩：奉戴日記念画』（昭和19、大塚巧芸社）
鹿島神社	④⑧	昭和癸未十二月八日秀畝画之	『丹心揮彩：奉戴日記念画』（昭和19、大塚巧芸社）
明治神宮奉献	⑧	戦捷祈願昭和十九■●■一月八日秀畝謹作	『丹心揮彩：奉戴日記念画』（昭和19、大塚巧芸社）
個人蔵	②④⑤	戦勝祈願昭和十九年二月八日秀畝作	
	④	昭和甲申春三月八日秀畝作之	
	⑤	秀畝寫	
	①	歳寒三友図昭和十■●三月	
信州高遠美術館	⑤	秀畝寫	明治26年頃の署名と似る、高遠美術館のHPで公開されているリストでは1919年頃とされるが、1996年刊の所蔵品目録では年代の記載なし
信州高遠美術館	⑤	秀畝	高遠美術館のHPで公開されているリストでは1919年頃とされるが、1996年刊の所蔵品目録では年代の記載なし
	⑤	秀畝	明治20年代後半の署名と似る
信州高遠美術館	⑤	秀畝	明治20年代後半の署名と似る
個人蔵		秀畝	明治20年代前半の署名と似る
	⑤	秀畝	明治20年代後半の署名と似る
	④		
	④	継隆模寫	
埼玉県立近代美術館			
	②④	秀畝	
	②④⑤	秀畝	
	②⑤	秀畝	
	⑤	秀畝	
	⑤	秀畝	
信州高遠美術館		秀畝	
	⑤	秀畝	
	⑤	秀畝	
	②④	秀畝作	
	④	秀畝作	
	④	秀畝	
	④	秀畝	
	④	秀畝寫	
	④	秀畝寫	
	④	秀畝寫	
	④	秀畝寫	
個人蔵	④⑤	秀畝寫	⑤では、《柘榴に鶏・木蓮鸚鵡》

No.	作品名	制作年	和暦	材質技法	形状	寸法(本紙) cm	出品歴等
485	竹外一枝・松菊猶存	不詳		絹本金地着色	二曲一双	168.0×340.0	
486	松下雉子	不詳		絹本着色	軸装	126.0×50.0	
487	春曉雉子	不詳		絹本着色	軸装	136.0×50.0	
488	美姫刺繍・老梅八哥・紅桃黄鸝	不詳		絹本着色	軸装・三幅対	各139.0×50.5	
489	蓮香・梨花九官・海棠鸚鵡	不詳		絹本着色	軸装・三幅対	各152.5×57.3	
490	不老長春	不詳		絹本着色	軸装	126.0×42.0	
491	山鳩野菊	不詳		絹本着色	軸装	126.5×32.0	
492	芙蓉鵲鴿	不詳		絹本着色	軸装	127.0×36.0	
493	早春二妍	不詳		絹本着色	軸装	136.0×42.0	
494	翡翠	不詳		絹本着色	軸装	128.0×34.5	
495	幽溪春蘭	不詳		絹本着色	軸装	180.3×71.8	
496	紅梅白鷹・柘榴鸚鵡	不詳		絹本着色	双福	127.0×35.8	
497	柘榴鸚鵡	不詳		絹本着色	軸装	131.7×51.4	
498	秋草	不詳		絹本着色	軸装	145.0×51.0	
499	八哥鳥 榴瓜	不詳		絹本着色	軸装	122.0×36.0	
500	春苑雙雀	不詳		絹本着色	軸装	127.0×35.0	
501	怒濤飛衛	不詳		絹本着色	軸装	156.0×51.0	
502	桃林牧牛	不詳		絹本着色	軸装	129.0×41.0	
503	翡翠硯魚	不詳		絹本着色	軸装	131.0×41.0	
504	秋景山水	不詳		絹本着色	軸装	137.0×41.0	
505	紅葉雙鹿	不詳		絹本着色	軸装	149.0×49.0	
506	棲賢橋・三疊泉	不詳		絹本着色	双福	各168.0×33.0	
507	武陵春色	不詳		絹本着色	軸装	136.0×49.9	
508	伊那四題(三峰川峡口・東駒千丈嶽・西駒嶽曙色・天龍古射橋)	不詳		絹本着色	軸装・四幅対	各39.4×51.2	
509	春曉・時雨	不詳		絹本着色	軸装・双福	各131.0×37.0	
510	秋塘	不詳		絹本着色	軸装	164.2×70.0	
511	桜溪鳴雉	不詳		絹本着色	軸装	142.0×50.4	
512	仙山桜観	不詳		絹本着色	軸装	87.0×99.0	
513	蘇州郊外	不詳		絹本着色	軸装	53.0×87.0	
514	美人化粧	不詳		絹本着色	軸装	142.0×51.0	
515	松林朝陽・林和靖・竹林明月	不詳		絹本着色	軸装・三幅対	各128.0×38.0	
516	浦島	不詳		絹本着色	軸装	140.0×50.0	
517	羅婦仙	不詳		絹本着色	軸装	126.0×42.0	
518	郭子儀・翠松白鶴・福祿寿	不詳		絹本着色	軸装・三幅対	各144.0×57.0	
519	梧蔭読書	不詳		絹本着色	軸装	128.0×51.0	
520	鳳凰	不詳		絹本着色	軸装	141.5×50.6	
521	牡丹孔雀図	不詳		絹本着色	軸装	257.3×87.8	
522	深山鳴鹿図	不詳		絹本着色	軸装	249.5×116.3	
523	不老寿帯	不詳		絹本着色	軸装	127.0×42.0	
524	双鴨	不詳		絹本着色	軸装	140.0×42.5	
525	新柳白鷺	不詳		絹本着色	軸装	122.0×41.0	
526	新柳	不詳		絹本着色	軸装	127.2×36.0	
527	紫躑白鷗	不詳		絹本着色	軸装	126.0×36.0	
528	鹿図	不詳		絹本着色	軸装	54.0×71.8	

所蔵館 ※は出典画集の所蔵者	出典	署名・落款	備考
	①③④	左・秀畝/右・秀畝画	
	④	秀畝	
	④	秀畝	
個人蔵	①④⑤⑦	秀畝	
個人蔵		秀畝寫	
	④	不老長春秀畝寫	
	④	秀畝	
	④	秀畝	
	④⑤	秀畝	
	④	秀畝	
	④⑤	秀畝	
	④⑤	秀畝	
	⑤	秀畝	
	④⑤	秀畝	
	④	秀畝	
	④	秀畝	
	④	秀畝	
	④	秀畝寫	
	④	秀畝	
	①④	秀畝	
	④	秀畝寫	
	①④	秀畝寫併録廬山志中詩（棲賢橋）・秀畝寫併録古人詩（三疊泉）	
	④⑤	秀畝寫	
	④⑤	秀畝	
	④	秀畝	
	①③④⑤	秀畝	
	④⑤	秀畝	
	④	秀畝画	
	④	舟筏上下塘河蘇州城外偉觀秀畝	
	④	秀畝	
	④	秀畝/秀畝画（中幅）	
	④	秀畝	
	④	秀畝	
駒ヶ根市立博物館	③④⑤	秀畝	
個人蔵	①③④⑦	秀畝	
個人蔵			
信州高遠美術館	⑤	秀畝寫	
長野県立美術館	②③④⑤	秀畝画	
	④	秀畝	
	④	秀畝	
	④	秀畝	
	⑤	秀畝	
	④	秀畝	
	③④⑤	秀畝	

No.	作品名	制作年	和暦	材質技法	形状	寸法(本紙) cm	出品歴等
529	松芍薬図	不詳		紙本金地着色		六曲一双	各156.5×320.6
530	老梅孔雀	不詳		絹本着色	軸装	145×51.0	
531	燕子花図(仮称)	不詳		紙本金地着色	六曲一双		
532	白鷹	不詳		絹本着色	額装	98.0×150.0	
533	海鶴蟠桃	不詳		絹本着色	軸装	128.0×42.2	
534	秋月雙鴨	不詳		絹本着色	軸装	123.0×42.0	
535	棠上瑞鳳・青鸞献寿	不詳		絹本着色	軸装	128.0×42.0	
536	雪中雉子	不詳		絹本着色	軸装	41.0×51.0	
537	青鸞献寿	不詳		絹本着色	軸装	141.6×51.6	
538	青楓棲鷺	不詳		絹本着色	軸装	128.0×51.0	
539	鴛鴦	不詳		絹本着色	軸装	133.6×50.2	
540	白鷹之図	不詳		絹本着色	軸装	125.0×36.5	
541	仙境瑞鶴	不詳		絹本着色	軸装	125.0×42.0	
542	劍翎驕春	不詳		絹本着色	軸装	180.0×70.0	
543	鷺頭	不詳		絹本着色	軸装	129.0×42.0	
544	魚藻	不詳		絹本着色	軸装	56.0×71.0	
545	楓溪遊鹿	不詳		絹本着色	軸装	128.0×42.0	
546	蓬萊山	不詳		絹本着色	軸装	35.0×50.0	
547	黎明之桜島	不詳		絹本着色	軸装	45.5×51.0	
548	溪村春遲	不詳		絹本着色	軸装	128.0×36.0	
549	觀世音之図	不詳		絹本着色	軸装	176.0×84.0	
550	象山先生像	不詳		絹本着色	軸装	142.0×57.0	
551	断崖蒼鷹	不詳		絹本着色	軸装	138.2×50.6	
552	老杉双鹿	不詳		絹本着色	軸装	132.8×47.2	
553	彩雲	不詳		絹本着色	軸装	138.0×50.0	
554	四季花鳥図	不詳		絹本着色	軸装	131.4×41.8	
555	紅梅鴛鴦	不詳		絹本着色	軸装	120.4×41.0	
556	鳩献蟠桃	不詳		絹本着色	軸装	120.3×42.2	
557	黄葉秋鳥	不詳		絹本着色	軸装	142.3×42.8	
558	緑蔭雛鴨	不詳		絹本着色	軸装	135.4×40.2	
559	靈山・山寺	不詳		絹本着色	双幅	各153.3×51.0	
560	秋草双兔	不詳		絹本着色	軸装	123.4×41.0	
561	寒溪群猿	不詳		絹本着色	軸装	139.5×42.0	
562	金碧雲山高隱図	不詳		絹本着色	軸装	172.8×50.6	
563	秋曉八哥	不詳		絹本着色	軸装	140.5×51.0	
564	竹林栗鼠	不詳		絹本着色	軸装	143.8×50.5	
565	疎柳白鷺	不詳		絹本着色	軸装	141.4×50.6	
566	飛鶴	不詳		絹本着色	軸装	147.8×41.5	
567	宮苑	不詳		絹本着色	軸装	144.5×51.0	
568	菊花飛鶴・牡丹胡蝶	不詳		絹本着色	軸装・双幅	各123.8×41.8	
569	岩上乃鷹	不詳		絹本着色	軸装	129.6×41.4	
570	老松雄姿	不詳		絹本着色	軸装	138.6×50.0	
571	海浜丹頂・雲中寿老・深山遊鹿	不詳		絹本着色	軸装・三幅対	各124.8×41.5	
572	雪中群鴨	不詳		絹本着色	軸装	129.5×35.8	
573	秋草郡鶉	不詳		絹本着色	軸装	143.0×50.0	
574	月下群禽	不詳		絹本着色	軸装・双福	各141.0×50.0	
575	曉山雲図	不詳		絹本着色	軸装	144.9×50.6	

所蔵館 *は出典画集の所蔵者	出典	署名・落款	備考
	水野美術館		
三重県立美術館		秀畝	
伊那市常圓寺		左隻左中「秀畝寫㊟㊟	
伊那市常圓寺	④	秀畝	
	④⑤	秀畝	
	④	秀畝作	
個人蔵	④⑦	秀畝作	
	④	秀畝作	
個人蔵		青鸞畝寿 秀畝寫	
	①④	秀畝作	
個人蔵		秀畝作	
	④	秀畝作	
	④	秀畝作	
	④⑦	秀畝作	
	④	秀畝作	
	④	秀畝	
	④⑤	秀畝	
	④	秀畝画	
	④	秀畝作	
	④	秀畝作	
	④	秀畝拝寫	
	④	秀畝謹寫	
	⑤	秀畝寫	
十方庵*	⑤	秀畝寫	
	⑤	秀畝寫	
	⑤	秀畝寫	
	⑤	秀畝	
	⑤	秀畝	
	⑤	秀畝	
	⑤	秀畝	
個人蔵	③⑤⑦	秀畝	
	⑤	秀畝	
	⑤	秀畝	
	⑤	秀畝撫古法	
十方庵*	⑤	秀畝	
	⑤	秀畝	
	⑤	秀畝	
	⑤	秀畝	
	⑤	秀畝	
	⑤	秀畝	
	⑤	秀畝	
	⑤	秀畝	
	⑤	秀畝/秀畝寫(中幅)	
	⑤	秀畝	
	⑤	秀畝	
	⑤	秀畝	
	⑤	秀畝	

No.	作品名	制作年	和暦	材質技法	形状	寸法(本紙) cm	出品歴等
576	高野道	不詳		絹本着色	軸装	158.2×28.4	
577	松間双鹿図	不詳		絹本着色	軸装	129.0×42.8	
578	授天百禄図	不詳		絹本着色	軸装	129.8×41.8	
579	桜花山雉図	不詳		絹本着色	軸装	130.4×41.0	
580	薺花軍鶏	不詳		絹本着色	軸装	129.8×42.0	
581	雪中寒牡丹小禽図	不詳		絹本着色	軸装	128.2×50.4	
582	林間	不詳		絹本着色	軸装	134.5×49.0	
583	双鶴	不詳		絹本着色	軸装	140.0×55.4	
584	蟠桃海鶴	不詳		絹本着色	軸装	130.4×36.4	
585	雪中白鷹	不詳		絹本着色	軸装	127.0×42.0	
586	石榴白頭	不詳		絹本着色	軸装	144.4×42.5	
587	三穀	不詳		絹本着色	軸装	126.0×41.0	
588	秋溪飛鳥・桜花小鳥	不詳		絹本着色	軸装・双幅	各127.5×35.0	
589	牡丹	不詳		絹本着色	軸装	126.0×41.0	
590	秋景群兔・桃花矮鶏	不詳		絹本着色	二曲一双	各155.5×157.0	
591	薰風	不詳		絹本着色	軸装	137.8×42.2	
592	群鶏	不詳		絹本着色	二曲一双	各170.0×184.0	
593	翠柳白鷺	不詳		絹本着色	軸装	129.0×42.0	
594	平安長春	不詳		絹本着色	軸装	120.2×36.2	
595	紅葉棲息	不詳		絹本着色	軸装	130.2×41.0	
596	早春八哥	不詳		絹本着色	軸装	48.4×57.6	
597	長春孔雀	不詳		絹本着色	軸装	50.8×56.8	
598	薺花双鶏	不詳		絹本着色	軸装	117.0×42.0	
599	菜花矮鶏	不詳		絹本着色	軸装	126.2×41.8	
600	岸上双鶴	不詳		絹本着色	軸装	127.0×41.8	
601	波頭双鶴	不詳		絹本着色	軸装	136.8×41.0	
602	千鳥	不詳		絹本着色	軸装	127.6×50.6	
603	香魚	不詳		絹本着色	軸装	127.0×40.4	
604	懸泉踊魚	不詳		絹本着色	軸装	127.6×35.8	
605	湖上群禽図	不詳		絹本着色	軸装	124.5×41.2	
606	紅梅	不詳		絹本着色	軸装	122.8×35.8	
607	桃に燕	不詳		絹本着色	軸装	120.2×35.6	
608	富貴草	不詳		絹本着色	軸装	128.6×41.5	
609	不老長春	不詳		絹本着色	軸装	128.0×36.2	
610	雄姿	不詳		絹本着色	軸装	69.2×86.2	
611	初冬	不詳		絹本着色	軸装	44.6×57.0	
612	牡丹花鳥図	不詳		絹本着色	軸装	48.8×55.8	
613	靈峯	不詳		絹本着色	軸装	47.9×56.5	
614	西王母	不詳		絹本着色	軸装	39.6×50.8	
615	楠公母子決別之図	不詳		絹本着色	額装	88.0×56.8	
616	春思	不詳		絹本着色	軸装	126.1×36.0	
617	秋草小禽	不詳		絹本着色	二曲一隻	173.0×174.8	
618	秋雨双禽	不詳		絹本着色	軸装	28.5×42.4	
619	不明(山桜・鳩)	不詳		絹本金地着色	二曲一隻	172.0×186	
620	武者歴史絵	不詳		紙本着色	六曲一双	各135×327	
621	老松群鶴図	不詳		絹本着色	軸装	138.4×50.9	
622	波上双鶴	不詳		絹本着色	軸装	124.3×41.2	

所蔵館 *は出典画集の所蔵者	出典	署名・落款	備考
	⑤	秀畝	
	⑤	秀畝	
十方庵*	⑤	秀畝	
十方庵*	⑤	秀畝	
	⑤	秀畝	
	⑤	秀畝	
	⑤	秀畝	
	⑤	秀畝	
	⑤	秀畝	
	⑤	秀畝	
	⑤	秀畝画	
	⑤	秀畝	
	⑤	秀畝	
	⑤	秀畝	
	⑤	秀畝	
	⑤	秀畝	
	③⑤⑦	秀畝(左隻)、秀畝画(右隻)	
	⑤	秀畝	
	①③⑤	秀畝	①では《秋冬群鶏》
	⑤	秀畝	
	⑤	秀畝	
	⑤	秀畝筆	
	⑤	秀畝	
	⑤	秀畝画	
	⑤	秀畝	
	⑤	秀畝	
	⑤	秀畝作	
	⑤	秀畝作	
	⑤	秀畝作	
	⑤	秀畝	
	⑤	秀畝	
	⑤	秀畝寫	
	⑤	秀畝	
	⑤	秀畝	
	⑤	秀畝	
	⑤	不老長春秀畝	
	⑤	秀畝	
	⑤	秀畝作	
	⑤	秀畝作	
	⑤	秀畝作	
	⑤	秀畝作	
飯田風越高等学校	⑤	秀畝画	
	⑤	秀畝作	
信州高遠美術館	⑤	秀畝	
	⑤	秀畝	
信州高遠美術館			
信州高遠美術館			
	⑤	秀畝	
	⑤	秀畝	

No.	作品名	制作年	和暦	材質技法	形状	寸法(本紙) cm	出品歴等
623	翠松白鶴・郭子儀・福祿寿	不詳		絹本着色	軸装	128.0×42.0	
624	旭日静波	不詳		絹本着色	軸装	129.8×41.6	
625	双鶴	不詳		絹本着色	軸装	126.2×35.8	
626	朝陽と海鶴	不詳		絹本着色	軸装・三幅対	各123.8×36.0	
627	秋艸鳴虫	不詳		絹本着色	軸装	121.5×27.5	
628	寒月	不詳		絹本着色	軸装	128.5×41.1	
629	湖畔之暁	不詳		絹本着色	軸装	128.1×41.4	
630	富嶽	不詳		絹本着色	軸装	137.6×51.0	
631	蓬萊	不詳		絹本着色	軸装	126.4×41.5	
632	秋景山水	不詳		絹本着色	軸装	127.2×41.4	
633	松竹梅	不詳		絹本着色	二曲一双	各168.0×169.6	
634	水仙と海棠	不詳		絹本着色	二曲一隻	166.0×171.6	
635	白孔雀と牡丹	不詳		紙本着色	色紙		
636	鶺鴒	不詳		紙本着色	軸装	119.8×40.8	
637	旭日静波	不詳		絹本着色	軸装	128.3×36.2	
638	祥瑞	不詳		絹本着色	軸装・双福	各13.0×35.0	
639	月都	不詳		絹本着色	軸装	124.3×41.4	
640	紫紅飛雉	不詳		絹本着色	軸装	144.0×51.0	
641	山藤野雉	不詳		絹本着色	軸装	128.6×41.5	
642	雪中双雉之図	不詳		絹本着色	軸装	128.5×40.4	
643	秋苑双鶏	不詳		絹本着色	軸装	124.0×41.5	
644	閼家全慶	不詳		絹本着色	軸装	128.2×41.0	
645	菊花双鶏	不詳		絹本着色	軸装	128.0×42.0	
646	雪中軍鶏	不詳		絹本着色	軸装	120.0×41.0	
647	雲之峯	不詳		絹本着色	軸装	43.0×56.5	
648	藤下雉子	不詳		絹本着色	軸装	141.8×51.4	
649	山桜雉子	不詳		絹本着色	軸装	144.0×51.2	
650	闘鶏	不詳		絹本着色	軸装	141.0×50.4	
651	難点軍鶏	不詳		絹本着色	軸装	121.6×42.0	
652	秋鹿図	不詳		絹本着色	軸装	153.0×50.4	
653	楓溪遊鹿	不詳		絹本着色	軸装	128.8×41.4	
654	高砂図	不詳		絹本着色	軸装	137.0×49.4	
655	時雨	不詳		絹本着色	軸装	122.4×42.3	
656	寒紅梅	不詳		絹本着色	軸装	113.6×41.2	
657	梅溪春早	不詳		絹本着色	軸装	123.2×42.0	
658	梅鶯・竹雀	不詳		絹本着色	軸装	各122.6×20.6	
659	秋景小禽	不詳		絹本着色	軸装	123.3×38.8	
660	溪梅	不詳		絹本着色	軸装	126.4×35.4	
661	夏晨	不詳		絹本着色	軸装	128.0×36.0	
662	秋草小禽	不詳		絹本着色	軸装	124.0×32.8	
663	蓬萊仙鶴	不詳		絹本着色	軸装	130.5×41.7	
664	蓬萊山水	不詳		絹本着色	軸装	120.5×42.5	
665	竹裡館	不詳		絹本着色	軸装	124.2×35.5	
666	海濱松鶴	不詳		絹本着色	軸装	129.0×41.6	
667	岩上双鶴	不詳		絹本着色	軸装	125.0×36.0	
668	波静鶴舞	不詳		絹本着色	軸装	129.0×42.0	
669	靈峯	不詳		絹本着色	軸装	127.4×36.5	

所蔵館 *は出典画集の所蔵者	出典	署名・落款	備考
	⑤	秀畝	
	⑤	秀畝	
	⑤	秀畝	
	⑤	秀畝	
	⑤	秀畝	
	⑤	秀畝	
	⑤	秀畝	
	⑤	秀畝	
	⑤	秀畝	
	⑤	秀畝	
	⑤	秀畝	
	⑤	秀畝	
	⑤	秀畝	
	⑤	秀畝	
サイトミュージアム	⑤	秀畝画	
	⑤	秀畝	
	⑤	秀畝筆	
	⑤	秀畝	
	⑤	秀畝	
	⑤	秀畝	
	⑤	秀畝	
個人蔵	⑤	秀畝	
	⑤	秀畝	
	⑤	秀畝	
松岡美術館	⑤	秀畝	
	⑤	秀畝寫	
	⑤	秀畝寫	
	⑤	秀畝寫	
	⑤	秀畝	
松岡美術館	⑤	秀畝寫	
	⑤	秀畝	
	⑤	秀畝図	
	⑤	秀畝	
	⑤	秀畝	
	⑤	秀畝	
	⑤	秀畝	
	⑤	秀畝画	
	⑤	秀畝	
	⑤	秀畝	
	⑤	秀畝	
	⑤	秀畝	
	⑤	秀畝寫	
	⑤	秀畝	
	⑤	秀畝	
	⑤	秀畝	
	⑤	秀畝	
	⑤	秀畝寫	

No.	作品名	制作年	和暦	材質技法	形状	寸法(本紙) cm	出品歴等
670	紅梅鴛鴦	不詳		絹本着色	軸装	128.2×35.5	
671	春雨	不詳		絹本着色	軸装	128.0×35.4	
672	秋郊矮鷄図	不詳		絹本着色	軸装	130.4×41.8	
673	新月飛鴨	不詳		絹本着色	軸装	125.8×42.0	
674	春暖	不詳		絹本着色	軸装	45.4×57.2	
675	耽	不詳		紙本着色	軸装	54.3×71.4	
676	鹿	不詳		紙本着色	軸装	48.6×57.0	
677	野雉叫雪	不詳		絹本着色	軸装	39.4×51.0	
678	木曾御嶽眺望図卷	不詳		紙本墨画	卷子	17.2×397.4	
679	蓬萊山	不詳		紙本墨画淡彩	軸装	47.0×63.8	
680	葦之湖望嶽	不詳		絹本着色	軸装	126.5×35.7	
681	暮春山水	不詳		絹本着色	軸装	168.5×55.5	
682	秋溪双雉	不詳		絹本着色	軸装	143.0×50.5	
683	靈峰	不詳		紙本墨画淡彩	軸装	67.5×133.5	
684	菊花双鷄	不詳		絹本着色	軸装	138.0×50.5	
685	千里独行	不詳		絹本着色	軸装	125.5×50.5	
686	磯松双鶴	不詳		絹本着色	軸装	158.0×71.5	
687	喜浴恩波	不詳		絹本着色	軸装	141.2×50.6	
688	秋晴	不詳		絹本着色	軸装	157.5×51.0	
689	林和靖	不詳		絹本着色	軸装	144.8×41.6	
690	春和	不詳		絹本着色	軸装	139.0×51.5	
691	夏殷	不詳		絹本着色	軸装	139.0×51.5	
692	秋爽	不詳		絹本着色	軸装	139.0×51.5	
693	冬静	不詳		絹本着色	軸装	139.0×51.5	
694	不老長春	不詳		絹本着色	二曲一双	各170.0×163.6	
695	小春	不詳		絹本着色	軸装	67.5×86.5	
696	林和靖	不詳		絹本着色	軸装	153.5×55.5	
697	桜雉楓鹿	不詳		絹本着色	六曲一双	各155.2×358.4	
698	秋雨双鷺	不詳			軸装		
699	老松鷹図	不詳			軸装		
700	秋草孤鹿	不詳			軸装		
701	秋草群鷄	不詳			軸装		
702	晚秋	不詳			軸装		
703	秋塘鷺図	不詳			軸装		
704	老柳蒼鷹	不詳			軸装	142.5×52.6	
705	名月秋草	不詳			軸装		
706	天龍川曳舟	不詳			軸装		
707	葵瀧図	不詳			軸装		
708	韓信忍辱	不詳			軸装		
709	国色天香	不詳			軸装		
710	時雨	不詳			軸装		
711	新月双鴨	不詳			軸装		
712	楊柳觀音像	不詳		絹本着色	軸装	176.5×83.5	
713	溪花映飛泉	不詳		絹本着色	軸装	134.2×48.8	
714	寒月飛鴨之図	不詳		絹本着色	軸装	54.5×82.3	

所蔵館 *は出典画集の所蔵者	出典	署名・落款	備考
	⑤	秀畝	
	⑤	秀畝	
サイトウミュージアム	⑤	秀畝作	
	⑤	秀畝作	
	⑤	秀畝作	
	⑤	秀畝作	
	⑤	秀畝作	
	⑤	秀畝作	
	⑤		
	⑤	秀畝作	
	②	秀畝	
	⑦	秀畝	
個人蔵	⑦	秀畝寫	
		秀畝寫	
	⑦	秀畝	
	⑦	秀畝画之	
個人蔵	⑦	秀畝	
	⑤⑦	秀畝寫	
	③⑤	秀畝寫	
	⑤	秀畝寫	
	⑦	秀畝作	
	⑦	秀畝作	
	⑦	秀畝作	
	⑦	秀畝作	
	⑦	不老長春■伝神洞主秀畝寫	
個人蔵	⑦	秀畝	
	⑦	秀畝画	
	⑥	秀畝画	
	①	秀畝	
	①	秀畝寫	
	①	秀畝寫	
	①	秀畝	
	①	秀畝	
	①	秀畝	
個人蔵	①	秀畝	
	①	秀畝	
	①	曳舟 天龍川 秀畝	
	①	葵瀧 秀畝寫	
	①	秀畝	
	①	秀畝	
	①	秀畝作	
	①	秀畝作	
個人蔵		秀畝拝寫	
個人蔵		秀畝	
個人蔵		秀畝	

〈研究ノート〉

松澤宥の現代芸術資料センター (DCCA) 構想と「オトシマエ」

「キチット オトシマエヲツケレルカ」会開催 趣旨書き起こしから

長野県立美術館 学芸員

古家 満葉

1. はじめに:「現代芸術資料センター(DCCA)」について

拝啓

私たちは、価値転換の時代における現代美術の概念普及のため、
「現代芸術資料センター (DCCA)」という拠点を東京に設立しました。今後は、新しい形式のシンポジウムやレクチャー、展示、セミナーの開催や、ニュース、雑誌、アンソロジーの発行など、さまざまな企画を考えています。そこで、皆様にお願ひがあります。記録、文書、写真、テープ、フィルム、複製、スライド、その他——数年以内のあなたの作品や活動に関する資料をお送りいただけませんか？

皆様のご協力に心より感謝申し上げます。今後ともよろしくお願ひいたします。

敬具

主宰 松澤 宥

現代芸術資料センター【図1】

註1 原文は英語、日本語は拙訳。The Data Center of Contemporary Artは、「現代美術資料センター」とも訳せ、松澤本人は時によって美術とも芸術とも呼んでいるため、呼称が揺れている。しかし、後述するプログラムの主催者名や、美術に特化した資料を集めているわけではないと述べていることから、本稿ではDCCAの日本語訳を「現代芸術資料センター」とした。

冒頭に引用したのは、松澤宥 (1922–2006) が世界中の芸術家たちに向けて英語で呼び掛けた要請文だ。発信元は、「現代芸術資料センター (The Data Center of Contemporary Art、略称DCCA)」(註1) ——これは、当時美学校で教場を開いていた松澤が、同校に附属する形で主宰したセンターの名称である。1973 (昭和48) 年に設立されたDCCAは、先に示した呼びかけを通して、国内外の芸術家たちの行為を記録する印刷物を収集した。それらは主に1970年代中頃から1980年代初頭までに発行および制作されたもので、収集された資料を閲覧できるようにする構想もあったようだが実際は叶わず、現

Yutaka Matsuzawa, Director
The Data Center of Contemporary Art

在も松澤アーカイブの一部として保管されている。芸術家としての松澤の活動の中で、表現活動と異なるDCCAについて触れられることは少ないが（註2）、資料の収集だけでなく、現代美術の概念を普及する目的で設立されたDCCAは、松澤が自身のコレクティブ活動を図示した概念図【図2】にも登場する重要な事項であるといえよう（註3）。加えて、同センターは資料収集のみならず、要請文や図にあるとおり、企画や出版もおこなう組織として計画されていた。1981（昭和56）年に、美学校の松澤教場（最終美術思考工房）が閉場しているため、おそらくDCCAもその辺りで精力的な活動を終えたと考えられる。

本稿は、DCCAの活動のうち、同センターが主催したレクチャー「キチット オトシマエヲツケレルカ」が録音された音声データの一部を書き起こすことで、松澤が目指した資料センターの構想や、同時代に発表された松澤の作品に内在する問題提起を概観することを目的とした。今回、採録した通称「オトシマ会」は、講演内容などから1975（昭和50）年に「文京区のお寺」（註4）を会場として開催されたものと推測される。筆書きされたプログラム【図3】には、「ジョイント・レクチャー『キチット オトシマエヲツケレルカ』」という題と、冒頭の挨拶を松澤が、そしてレクチャーの講師を津村喬、松岡正剛、梅原正紀、木村恒久、閉会の挨拶を今泉省彦が担当したことが記載されている。このレクチャーに関する資料としては、前述したプログラムのほか松澤による挨拶文の草稿、また松澤の挨拶と津村喬の講義が録音された音声データ等が確認できる。しかし、同会の詳細をまとめた先行研究はないため、開催趣旨を述べた松澤の音声を、一部注釈を加えて以下に書き起こした。なお、音声鮮明でなく、聞き取りが困難であった箇所は伏せ字とし、句読点および段落、斜体等は書き起こし時に編集した。

註2 これまでDCCAについては、『ニルヴァーナからカストロフィーへ：松澤有と虚空間のコミュニケーション』（オオタファインアーツ、2017年）で言及されるほか、橋川英規氏の発表「松澤有によるアーカイブ・プロジェクトData Center for Contemporary Art (DCCA) について」（第9回文化財情報資料部研究会「松澤有アーカイブズに関する研究会」東京文化財研究所、2022年3月17日）や、同氏による調査研究に詳しい。

註3 資料センターの構想自体は松澤独自の発想ではなく、同時期に水上旬によって発行された『汎儀レボウト』第64号（1973年・年頭）において、「観念含有体・点集合体構想の対外的展開—究極表現研究所設立の準備—」として提案されている。水上は73年まで松澤の「最終美術思考工房」の助手を務めた。

註4 「今回配達された手紙は、文京区のお寺でやるジョイント・レクチャーと称する講演会への出席要請書である。テーマは『キチットオトシマエヲツケレルカ』という唐突なものだった。私は人前で話をするのはもっとも不得手とするところなので、おそらく出席しないことになると思うが、もし不慮の事態で出席してしまった場合、いったいどんなことをしゃべるのだろうか。」赤瀬川原平「たった一人の力で」『Jazz』5月増大号（通巻33号）、ジャズ・ビープル、1975年5月、250頁。

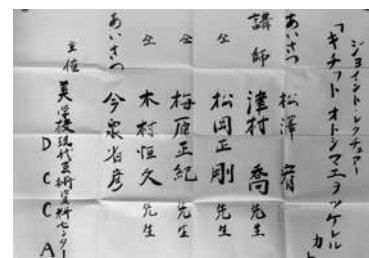


図3 「キチット オトシマエヲツケレルカ」会プログラム（1975年か、個人蔵）

2. 「キチット オトシマエヲツケレルカ」 開催趣旨

松澤でございます。今日の「オトシマ会」の主催者になっています。「現代美術（ママ）資料センター」の責任者といたしまして、最初にご挨拶したいと思います。この資料センター「DCCA」というのは、一昨年に美学校の中へできまして、まだ今日のこの講演会がほとんど第一回の催し物というようなことでして。ほとんどといいますのは、去年4月にドイツ文化研究所で一つ催し物がありまして、それについては後で触れたいと思いますが、その時にかなり陰で協力をいたしましたので、そういう意味でほとんど第一回という、主催としましては、はっきり銘打ったのは第一回ということになります。それで実は、最初にお断り

しておきたいと思いますが、広告には小杉武久先生のお名前があったわけですが、先週の予定で組んでありまして、スケジュールが今日ふさがっちゃったとおっしゃいまして、残念ながら今日お見えになりません。その代わりに松岡正剛先生にご連絡を、前からしてあったわけですが、お見えになると思います。まだお見えならないので電話をおかけしたりするわけなんですけども。それを一つ先にお話をしたいと思います。それから今日のジョイントレクチャーといたしまして、シンポジウムのような形をとりましたが、■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■、あるいは運用されている形で、その中のことにするというのも一つあるわけですが、今日は実はそういう形を作りませんで、講師の先生方に30分を時間にして、連続的に次々とかいうレクチャーをしていただく。そして、最後にもしこの先生とのこの問題についてお話したいということがありましたら、直接その先生にあたってくださいまして、時間の余裕が先生にございましたら、場所を変えてどこかで話し込んでいただくというふうな形を取りたいと思います。それを最初にちょっとお断りしたいと思います。

イギリスの方で最近の評論としましては、「インフォメーション・アート」（註5）というような言葉がありまして、これで資料センターの役割なんかが大分大事になってくるわけでして。一品の作品を作って、それを展覧会の壁面にただ飾っておくっていうだけでは不十分で、どうしても、もっと別な展覧会形式、あ

るいは国際展のビエンナーレみたいなものでも、今までの形式はやっぱり非常に行き詰まっているし、それじゃあどうしようもないというところに来ているもんですから、別の形で、例えばワークショップというような言葉が、最近使われ始めているわけですね。そういう形も取っていかなくちゃいけないというようなことで、資料センター、それから美学校、その他が絡み合ってワークショップというような機能も作り上げていかなくちゃいけないと思うんですが、なかなかこれは難しいことだと思います。去年一昨年あたりにベルリンのワークショップというのが始まりそうな形で、世界中からいろいろな方が集まって始めようとしたら、動き出していないような感じで。やっぱり新しいやり方ですから。そう今までのあった形が踏襲されているということでないから、なかなかうまく滑り出さないというような面もあると思います。とにかくそういう形で、この資料センターが今後は動いていくんじゃないかというふうに思います。

それから先ほちょっと申し上げました、去年4月にドイツ文化研究所で、一つの展覧会、今までの展覧会の形式とはずいぶん違うわけですが、「アップ・アート・トータル・コミュニケーション'74」(註6)【図4】(カラー4頁)【図5】

註6 「アップ・アート・トータル・コミュニケーション'74-概念芸術の開かれた提示と予見-」(会期: 1974年4月25日~28日、会場: 東京ドイツ文化研究所、主催: 東京ドイツ文化研究所、世界蜂起実行委員会、「芸術倶楽部」)

アップ・アート
トータル・コミュニケーション'74

4/25-28
(水)(日)
●会場 東京ドイツ文化研究所
港区南青山7-1-56
OAGビル内(589) 6365

概念芸術のひらかれた提示と予見

そこには参加者の閲覧をまっぼう大な資料群があり、
そこには参加者をまきこんだ制作があり
そこにはハプニング概念を訂正させるアクションがあり
そこには概念芸術の基本ともなる言語ゲーム
や観念合成法のセミナーがあり
そこには参加者・蜂起者・媒介者が交互に
交叉する対話があり
そこには芸術にとって蜂起は可能かを問うなどの
インターディシプリナリーなシンポジウムがあり
そこには次なる催しへの
コンティニューム(連続)がある

●テーマ展示 <世界蜂起1,2,3> <紀元2000年にルーブルへ>
●資料群 <情報、記録、文献、テープ、スライド、フィルムその他>
●制作 <ビデオ、コピー等による制作、複製、カタログ作製>
●行為 <池田竜雄(梵天の塔)、バーリバーナ・バーリヤーヤその他>
●セミナー <言語ゲーム、観念合成法など>
●対話 <参加者、蜂起者、媒介者による>

島1 → 究極表現研究所、DCCA カタストロフィ・アート
島2 → CAYC(アルゼンチン) Head Museum(フィンランド) WORKS(カナダ)
AKUMULATORY72(ポーランド) Inhabress Archive(オーストラリア)
Something Else Farms(アメリカ) I.A.E.(西ドイツ) CAED(西ドイツ)
島3 → FILE(カナダ) Art & Language(イギリス) The Archive Joan Brown(アメリカ)
New Archive(ユーゴスラヴィア) New Reform Agency(ベルギー)
Abbeoda Center(スウェーデン) Galeria SUM(アイスランド)

●シンポジウム
4月27日(土)
pm 6:00より同会場にて
テーマ
講師
北沢方邦
針生一郎
中原佑介
松沢 実
(敬称略、50音順)

芸術倶楽部 特集=概念芸術
——ミニマル・アート、もの派を経て現代美術に至りつた概念芸術とは何か?
●宮川淳、峯村敏明、中原佑介、石崎浩一郎、寺山修司、高松次郎、松沢実、柏
原えつとむ、河口龍夫、塩見充枝子、ローレンス・ウェイナー、ジョセフ・コススほか

74年8月号 隔月刊
4月25日発売 750円

主催=東京ドイツ文化研究所 世界蜂起実行委員会 / 「芸術倶楽部」

図5 「アップ・アート・トータルコミュニケーション'74」展広告(デザイン: 田中孝道、1974年、個人蔵)

という展覧会をやりまして。それがワークショップの形を取ろうとして、不十分ではあるし、いろいろと批判も出ているわけですが、今までの展覧会でない形を取った最初のものじゃないかと思います。それで、どんなふうなものであったかっていうのをちょっと少しご紹介したいと思いますが、実はこの「アップ・アート・トータル・コミュニケーション」という展覧会には、展覧会というのか、催し物のワークショップには、テーマが二つありまして、「世界蜂起一、二、三」というテーマと、もう一つ「紀元2000年にループルへ」という二つのテーマを持っています。その「世界蜂起」といいますのは、私がやっております虚空間状況探知センターというところで要請しまして、内外の美術家たちがそれに賛同してくれまして、毎年大晦日の日にどっかで何かをやって、そしてその記録を届けてほしいと、その気持ちは世界中で蜂起する気持ちでというような、そういうお願いをして、その記録が世界中から集まってまいりまして、それが「一、二、三」というのは「第1回、第2回、第3回」という意味でして、だいたいそれが集まって、それを全部展示したということが一つあるわけです。それで、テーマ「世界蜂起一、二、三」というのがあります。

それからもう一つ、「紀元2000年にループルへ」と言いますのは、これはちょっとお話ししないといけないと思うんですけども、ヘルシンキに一つ美術館のかたまりがありまして、そこで「ヘッド・ミュージアム」という展覧会の組織を一昨年して、それはやっぱり世界中にその作品を出してほしいということを要請して、出して、やったわけですね。それが根幹になる展覧会で、そろそろやったのかな、始まってののかなというような時期に、ちょっとまたもう一回、便りが飛び込んできてまして。作品はだいたい集まったけども、単にそれを1回やるだけではつまらないから、それを巡回展にしたいと。ヘルシンキの後、北欧のストックホルムとか、あるいはスウェーデンのルンド、それからアイスランド、オスロあたりまでずっとぐるぐる回して、それをいつまでも回して行って、紀元2000年にそれをループルへ押し込もうと。つまりその間、巡回している間に膨れ上がって行って、物量的にも、物量というか事業的にも多大なものになって行って、2000年には今であるルーヴルの垣根を排除して、それに入っちゃおうと、そういう提案をしてきてまして。もちろんそれを■■■■■■■■三つやったわけですが、ただそれが北欧だけでやってるのは惜しいと思ひまして。私が、世界の八か所に向けて、そういう提案が来たけども、一つ八か所から全部そういう展覧会を出発させて、それで世界中でぐるぐると、そういう巡回展をやってきて、それでそこだけのループルで■■■するのではなくて、世界中からループルになるというものが起きてるんです。例えループルになるものがあると、そういう呼びかけをしましたら、よろしいと、やろうじゃないかという返事が来しております。それでまあ、そういう気持ちで動いている、動き始めている展覧会が各地にあるわ

けです。僕たちには、アルゼンチンで展覧会をやると言いましたが、アルゼンチンでこの間終わったという新聞の広告が切り抜きに入ってきました。それはその後、日本の中での巡回展でなくて、それはここから出発させていきなり南米行って、サンパウロを、その他を、ブラジルあたりでやって、それが今度カナダへ行き、今コースが決まっているのはカナダの次にアイスランド行き、それからベルリン行きとその辺までは大体やるだろうと決まってるわけですね。そういうふうにして巡回していったのが、やはり、その、ループルに向けての一つの動きでもあるわけです。その間に作品の入れ替えてというのが、僕はこの辺でちょっとそれを引っ込めるといような問題も起きてくるでしょうし。なお、巡回しているうちに、だんだんその量、あの新しい作品が加わっていくということもあると思いますが、そういう二つのテーマを持って、ドイツ文化でやった時には、いたわけなんです【図6】。それから壁面へ送られてきたものを展示したわけですね。これはもう膨大な量で、写真、それから文書、その他もの、実際のオブジェ、ものが送られてきてたわけですけども、そういう全部をそこへ展示及び閲覧できるように机の上に置いたと。それからテープ、スライドも来ておりまして、そういうものも上映する。それから上映したり、再生、音だというようなことがあったわけです。それからなお、ビデオ、それからコピー、ゼロックスの機械を会場におきまして、そこで新しい制作をします。つまりゼロックスを使った作品を作る

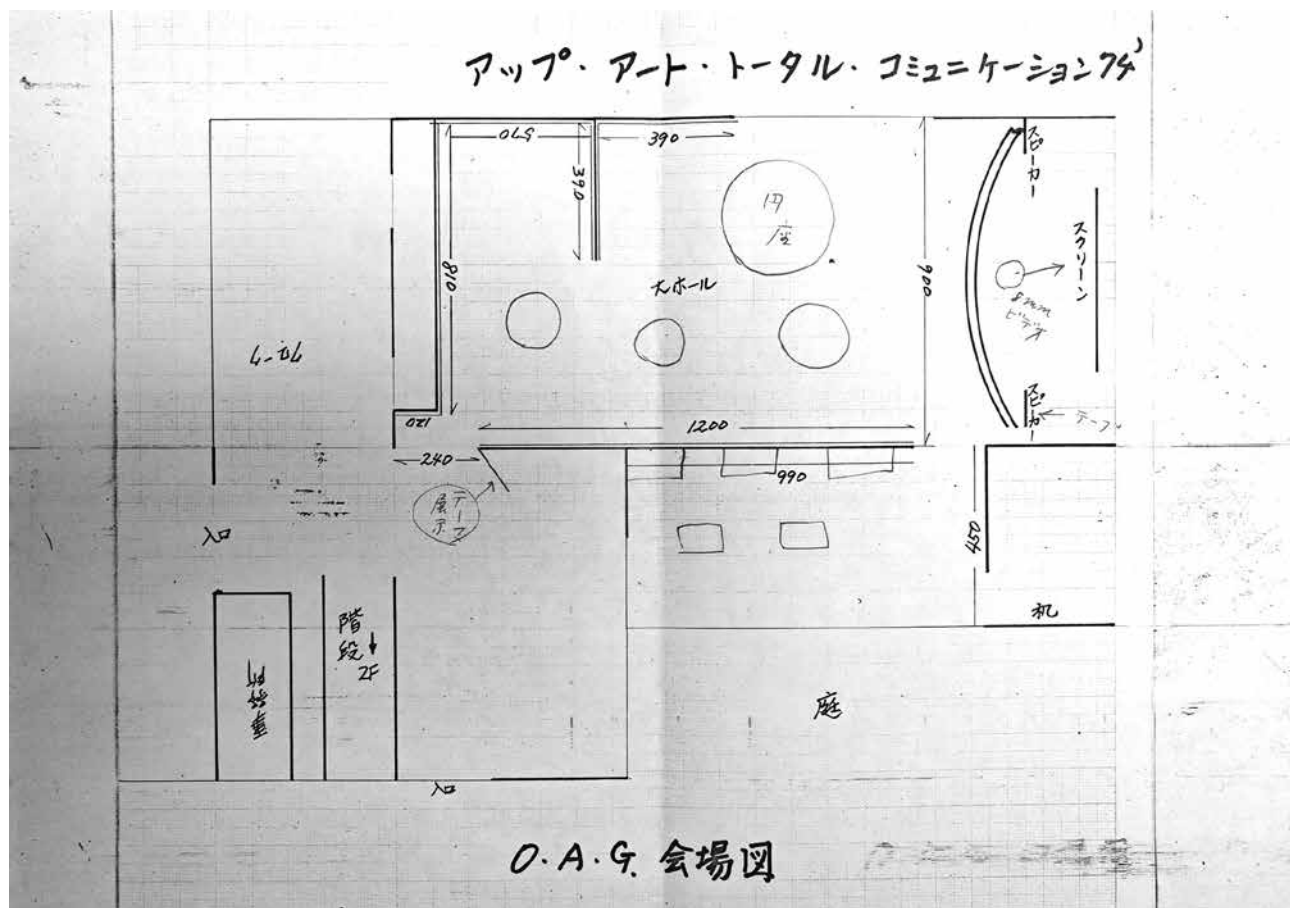


図6 「アップ・アート・トータルコミュニケーション74」展会場地図(1974年、個人蔵)

ということ。これはあんまりうまくいかなかったような気もするんですが、来た人がカタログを自分で、これとこれとこれの作品を撮っていきたいからという意味で、■■■んで、貼ったりを外してってゼロックスでたてると、来た人のカタログができるわけです。来た人がこれとこれとこれによるカタログを作りたいと思ったら、そういうカタログがゼロックスを使ってできると、そういう仕組みにして、これはやっぱりかなり面白いことじゃないかと思うわけですよ。本当にこれが徹底できたら、初めてなもんですから、そうはうまくやっぱり実践できなかったわけですけども、そういうその場でもカタログを作ったり、作品を作ったりするということ。それからもちろん、その時パフォーマンスといいますか、イベントというか、そういうこともそこで行われて、それもビデオで記録されるというようなこともあったり、記録され、すんで、そこでまた再生されています。それからセミナーとしまして、「言語ゲーム」、「観念合成法」というふうな二つぐらいのセミナーをやりまして、これもうまくいかなかったような話ばかりするといけませんけれども、最初の試みなもんですから、やっぱり今日は成功というほどにはいかなかったんじゃないかという気がするわけですけど、ともかくそういうセミナーも展覧会にある。それからもう一つは、参加している人、参加といいますか、その展覧会を見に来てくれた人、それから蜂起している人「蜂起者」、世界蜂起っていうテーマなんで蜂起している人、つまり作品を展示している人ですね。それから「媒介者」と言いますか。色々な媒介者がいると思いますが、作家と見ている人をこう媒介するような機能を持っている色々な人、というような人が、できるだけそこに対話をしようということで。普通の展覧会でしたら、その作品だけがそこに、壁にあれば作家はいないと質問したいこともできないというようなことですが、そういうことで、作家がそこにいれば、なるべく作品だけのことじゃなくて、また別の話もどんどん深くできるというような、そういう仕組みをとったわけです。これが「アップ・アート・トータル・コミュニケーション」というワークショップのあらましですね。

この「アップ・アート」というのは、ライズ・アップ、蜂起するという意味で「アップ・アート」としたわけです。「ポップ・アート」あるいは「オップ・アート」なんか色々あるわけです。それをずっともじったような名前になったわけですね。蜂起、芸術一揆のための一揆芸術といいますか、そういう意味での「アップ・アート」。それも何に向かって、なぜ蜂起するかっていうのは、問題も全然、別に、大問題があるわけですね。そういうようなことも今言った銘々な人の対話の中で、あれこれ色々言われたこともあると思います。それから、そういうことを、いくらか結びついたような、■■■の社会でのやり方のひとつに捉えられている、■■■■■■いいんじゃないかという気持ちはあるんですけどね。ひとつ、これは、私の作品で《ドンデンがえし計画》【図7】というのを、あちこちの

ドンデンがえし計画

歴史は強者の生存を
終始支持しつづけた
へボイ歴史を終らせ
弱者が強者を虐たげ
オモイヲハラス為に
何をなすべきかその
方法技術アイデアを
広く世界の芸術家に
わたしはもとめます
おゝドンデン返して
ギロチンにでもはた
八裂きにでもイヨッ
島流しでもアッソウ
玉ヌキでもアッソウ
キチッとタツフリと
オトシマエをつけて
おっつけだめになる
地球ともオサラバヨ

図7 松澤有《ドンデンがえし計画》(1973年、個人蔵)

展覧会で出しているんですけど、作品を一つの展覧会に出せば他にはあんまり出さないというやり方ではなくて、言いたいことはどこの展覧会よりも何回でも出すというふうな。そういうようなやり方を、一つ、取り始めた面もあるわけですね。読ませていただきますと、美術が言葉によって表現されているふうな面を一つ持ち始めているわけですが、私の作品もほとんど言葉だけで、言葉を使って、それを展覧会へ展示するみたいな形をとっているわけでした、その《ドンデンがえし計画》というのを一つご紹介したいと思います。「歴史は強者の生存を／終始支持しつづけた／へボイ歴史を終らせ／弱者が強者を虐たげ／オモイヲハラス為に／何をなすべきかその／方法技術アイデアを／広く世界の芸術家に／わたしはもとめます」。まあ、これは最初芸術家としてありますが、誰でもいいわけですけど、その後、そういうふうに訂正したものをあちこち出してる

わけですね。これを「おゝドンデン返して／ギロチンにでもはた／八裂きにでも
イヨッ／島流しでもアッソウ／玉ヌキでもアッソウ／キチッとタップリと／オトシ
マエをつけて／おつつけだめになる／地球ともオサラバヨ」というふうになりま
す文章ですが、こういう文章とほとんど似たような考え方の作品も、もちろん内
外に出始めているわけでして、これは文章で書くというふうな形式をとって、と
り始めているんで、やりやすいという面もあるんじゃないかと思います。今ま
での技術の表現だと、なかなかこんなふうな伝達ができなかったんじゃないか
というふうな、今一つしているわけです。それから今申し上げたようなものは、
ほとんどこういう紙切れに書いたり、それから写真のピラっとしたようなもので
して。一品で、大層な額へ入れて、それを後生大事と壁に飾るというようなやり
方でないもんですから、紙切れ、その時から「紙切れ派」みたいな言い方にさ
れているわけですが、そういうものが、ルーブルの名品といわれているよ
うなものを排除して入っているというような、そういうような考え方も一つやっ
ぱり美術の中では、世界中で今起こっている一つの考え方だと思います。それ
から今まででしたら、国際展なり何々だと、いわゆる日の当たる作家たちだけ
が、日の当たる場所でやっている展覧会というようなことになるわけですが、今
度の巡回しているそういうようなものは、そういうことではなくて、おそらくもっ
と草の根的な美術家たちといいますか、その人たちが、草の根的な表現を世界
中でやっている、それはあんまり日の根には当たらないけれども、やがてそうい
うものが、今までの規定のそういう美術を排除するというようなことも、こ
こにみんなやっぱり考えておられます。

それから、ドイツ文化研究所の「トータル・コミュニケーション」という後の、
「アフター・トータル・コミュニケーション」という、後の方の部分ですけども、
これは色々な形でやっぱりコミュニケーションされていかなきゃいけない、た
だ、絵面だけで、分割しているような事実ではどうしようもないところまでやっ
ぱり来ているということが一つあるわけでして。ですから、先ほど申し上げまし
たように、資料を展示して、そういうものまでいちいちひっくり返して、みんな
で見合うつと、話し合うつと、色々な形をとるんじゃないかと思います。この「トー
タル・コミュニケーション」というようなことでは、また後で、専門にこういうこ
とを研究されている先生のお話の、あるいは■■■■■していただけるんじゃないか
と思っているわけですね。それから、さっき「ドンデンがえし」というようなこ
とを言ったわけですね。弱者が強者を虐げる。しかし、■■■■■■■■■■、そ
の弱者は強者の立場になる■■■■■■■■■■ことができるっていうんで、私
の考え方としますと、その弱者が強者をやっつけて虐げた瞬間に、その歴史が
終わる必要がある。そういうふうに考えられます。そうでないとやっぱり、ただ
一個、場所が変わるだけで、決してその人間の慎重化がされないということが

あると思います。■■■■■の問題なんかも絡んでくるわけですけども、あるいは「ニルヴァーナ」というふうな言葉の問題、完全な歴史上の状態、死の状態っていうのは、そういうもの、そういうものに向かったのそれです。それを実現するために、美術家たちの組織をしています。そういう面が一つ、かなり、最近の中に出てきているのであります。

それからもう一つだけ、紹介させていただきまして、私の先に、去年、京都で「シグニファインイング」(註7) っていう、展覧会をしたわけです。「コミュニケーション意味作用」っていうまあ、これ言語学なんかの言葉のようですけども、そういう題名を使った展覧会があって。これには態度表明を義務付けたわけです。出品者に言葉で態度表明してくれと、他の自分の美術の作品以外に、言葉によって態度表明してくれということで、みんなその、これも不十分だったので、色々うまく実現されなかった展覧会なんですけれども、やっぱり言葉でこういう作品をどういうふうに意味で作るのかということを述べるというようなことも、一つやっぱり最近どうしても必要を感じていることでして。その時に、私の出した作品の一つ、読ませていただきますと、《射祷》という、「エジャキュレーション」という、これはカトリックの祈祷の形のものですけども、非常に簡単な祈りを端的にする祈りの形式だそうですが、それをとってこういう文章を提示したわけです。「宇宙は完全な平等に向けて進化していく。／宇宙は完全な平等が実現された時に真に実現され、すなわち完成される。／それを消滅と称しても良い万物は皆同じ人類も同じ芸術もまた同じすべての差別は排除されなければならない。／完全な平等が実現された時に自由も博愛もなくて済ませる。／私は私はかく絶叫する」という、態度表明文って言いますか、それに合わせて、私の作品としまして、《芸術のパリティ即》、パリティっていうのは「平等」という意味で、物理学、原子物理学なんかでも出てくる言葉なんですけど、「芸術のパリティ則。／一、芸術は平等でなければならない。／二、芸術は平等の為にななければならない。／三、芸術は平等そのものと書かねばならない」。ええ、こういう簡単な文章を私の作品としているわけなんですけど。そんなことで、その世界の資料センターの責任者と言いますか、ご挨拶を兼ねて、私の今日のお話を終わらせていただきます。

註7 「シグニファイング 言語・事物／態度の表明とともに」展(会期:1974年11月6～10日、会場:京都市美術館、主催:シグニファイング共同実行委員会)のこと。実質的な主宰者であった水上旬を中心に、河川龍夫、小清水漸、沢居曜子、清水誠一、庄司達、松岡正剛、真板雅文、松澤宥、宮崎豊治、村岡三郎、山本圭吾らが出品した。

3. おわりに: 松澤宥の「オトシマエ」

以上に、「オトシマエ」における松澤のあいさつを書き起こした。ここから読み取れるのは、DCCAの概要だけでなく、当時の松澤が目指した芸術の在り方——「トータル・コミュニケーション」としての芸術と、弱者が強者に「オトシマエ」をつけるため連帯していく、群としての芸術の在り方である。例えば、

「オトシマ会」に先行して開催された「アップ・アート・トータル・コミュニケーション'74」のポスターには、その展示の概要を示す以下の文言が記されている。

そこには参加者の閲覧をまっぼう大な資料群があり、
そこには参加者をまきこんだ制作があり
そこにはハプニング概念を訂正させるアクションがあり
そこには概念芸術の基本ともなる言語ゲーム
や観念合成法のセミナーがあり
そこには参加者・蜂起者・媒介者が交互に
交叉する対話があり
そこには芸術にとって蜂起は可能かを問うなどの
インターディシプリナリーなシンポジウムがあり
そこには次なる催しへの
コンティニューム（連続）がある

強者の世界に「オトシマエ」をつけるため、蜂起することを求めた松澤が必要としたのは、DCCAの収集対象でもあった「ぼう大な資料群」——芸術家たちの活動が記録された「紙切れ」だった。そして、1970年代における松澤による「芸術一揆のための一揆芸術」の目論見は、「世界蜂起」や「カタストロフィ・アート」、そして「DCCA」と、様々なプロジェクトによって引き継がれていったのである。

附記 本稿の執筆にあたって、松澤久美子氏、田中孝道氏、木内真由美氏にご協力いただきました。記して謝意を表します。

『長野県立美術館紀要』投稿規定

1. 発行

本誌は、年1回発行する。

2. 投稿資格

長野県立美術館の職員(元職員含む)、その他美術館が主催する事業への協力者など。

3. 投稿内容

論文は原則として未発表分のものに限り、本文・註を含めて一篇20,000字以内、挿図は30枚以内を基準とする。研究ノート、資料紹介等は、一篇8,000字以内、挿図は10枚以内を基準とする。

4. 原稿の締め切り

毎年、1月末日とする。

5. 執筆者校正

原則として初稿のみとする。

校正は誤字脱字の訂正など最小限にとどめる。

6. 著作権

著作権は、著作者(共同執筆者含む)自身に帰属するものとする。ただし著作者は、当研究紀要の複製権(電子化する権利)と公衆送信権(公開する権利)を長野県立美術館に対して許諾したものとみなす。当館が複製及び公衆送信を第三者に委託した場合も同様とする。

7. その他

挿図に用いる写真等の掲載許諾については、投稿者が自らの責任において、しかるべき手続きをとる。

長野県立美術館紀要 第19号

2025年3月31日発行

編集・発行 長野県立美術館

〒380-0801 長野県長野市箱清水1-4-4

電話 026-232-0052

PRINT ISSN 2436-8555

ONLINE ISSN 2436-8571

デザイン 中沢定幸(中沢デザイン事務所)

印刷 中外印刷株式会社

© Nagano Prefectural Art Museum 2025

長野県立美術館紀要

第十九号

ISSN 2436-8555

二〇二四

長野県立美術館紀要

第十九号

NOM